

Tは熱し切つて、彼の爲めに大に辯護した、わが輩同感の叫びを高くした。

○

「ズツと向ふに大きな松が見えるでせう、あそこが野崎です。」と、運轉してゐた多田君が云ふ。見ると、成程松が見える。松ばかりか島が見える。突き出た岩が見える。船はグン／＼近付いて行つた。

眸を凝らすと、大きな人家が幾つもあるが、流石に漁村らしい氣がする。幾十年振りです。云ふ所へ来たことであらう。

傘を指した人が走つて来る。船が全く岸に附着すると、最初の人に續いて又誰かど来た。

「光顯寺から来ました。」と、彼は云つた。

荷物を上げてくれる。自分のぬれるのも構はず傘を差伸べてくれる。

石でコロ／＼した道を歩いて、村道に來た。そこから光顯寺まで直ぐであつた。行き交ふ村童は申合せた様に首を下けた。二十二年前まだ中學生の時に、此の邊に旅を

した時も矢つ張り左様であつた。純樸な人情が此の間にひそまれてゐる様な氣がした。

光顯寺は此の島に此の寺あるかと驚かるゝばかりの大きな寺であつた。門に右した板壁にかゝつてゐる黑板に白墨で何か書いてある。讀んで見ると子供への修養辭である。今その文句を忘れたが「時間ヲ守ル人ハ成功スル人ナリ」式で、皆タメになる文句であつた。住職が單にお念佛ばかりで老人を相手にせず、進んで第二の國民への涵養に努めてゐる精神を頼もしく思ふた。開化した坊さんだナと思ふた。頭腦のすゝんだ坊さんだナと思ふた。あとで聞いたんだが、住職豊原智洞師は私の觀察通り、果して彼は東洋大學及び駒澤大學に學んだ逸足の僧侶であつた。

「やア、よくこそ。さア、さア。」

玄關まで來た時、住職豊原師は左様云ふて待ち受けた。

庭に面した朱色の長い廊下を隨いて行く。一番奥まつた部屋に案内された。そこには又古色蒼然たる庭が披かれてゐた。雨の音と相俟つて一入静閑さを漂はせてゐる、流石は鄙の寺院だ。

「お疲れで御座いましたでせう？」

「何分雨で。然しいゝ景色でした。いつ來ても能州の海は格別ですねえ。」

などゝ話込んでみると、先刻迎へて呉れた青年が眼七分にして、お茶を捧げて來た。いつもガブ／＼一飲みにグイとコップ茶にする乃公大に痛み入つて了ふ。

一口して見る。實に苦茗だ。本願寺の法主が飲む様な茶だ。二人共咽喉が乾いてゐたから、幾度となくお代りした。此の青年は村の小學校の先生で、村中屈指の素封家の息子さんと智洞師は教へた。中山孝憲と云ふ見るからに眞摯な型だつた。

そこへ又一人の僧が現はれた。私は此の村續きの佐波の淨覺寺の僧寺島浩と申す者でと自己紹介した。寺島師はそれは驚くばかりの物識りであつた。何でもよく知つてゐた。東京の事情にも詳しかつた。だん／＼訊くと村にゐる唯一の樂しみは、世の變化を見つめてゐることだと云ふ。それ故を以つて東西の新聞は隅から隅まで精讀してゐますと答へた。道理でと私は大きく頷いた。見るからに溫良な、穩かな僧侶であつた。私は坊さんと云ふもの、殊に田舎の僧はお經を擧げて南無阿彌陀佛とさへ云つて

居れば、それで能事終つて了ふものだと思ふてゐた謬が此の島へ來て、此の二人に直面して遺憾なく正されて了つた。揃ひも揃ふて堂々たる識見を持ち、自己啓發の途に邁進を續けるの士であつた。一能登島の片樞に置くのは惜しい氣がする。

私共のゐる部室は此の村でも第一番の部室だと云ふ。そののみかその昔明如上人がお泊りなすつた因縁あるものだと、訊かされて、二人共顔見合せて今更の様に四邊をグル／＼した。

間もなくお風呂が沸いたからどうぞと云ふ。例の地獄風呂だ。抑々地獄風呂とは一枚下に焦熱の釜底あり、夢々浮べる板を除くなけれ、宜しく板の上から踏み入らる可しと教へられたけど、そんな事はチャンと知つてゐた。知つてゐるけれど、熱心に「ハ、ア、ハ、ア」と顎を撫でゝ聽いて、貝原益軒を定め込んだ。

座敷へ朗らかな顔して戻つて來ると、橋本と云ふ北陸第一のコロタイプ寫眞師の橋本君が住職の招きに應じて遙々遣つて來た。席に來たり、大に語る。

その日の夕飯はうまかつた。何しろ生きてゐた許りの肴を料理して喰わすんだから、

美味それに優るものがなかつた。出た酒は我等の爲めに、遠く海をへだてた七尾港から取寄せたものだと言ふ。悉くその厚意を深謝す。如何にして遠來の客を款待せんかと云ふ心づくしの程は此の一端でもうかゞはれた。

○

翌日も雨だつた。空をにらみつけてゐるばかり。むざ／＼あたら時間を其儘くだらないことをして費すよりはと、原稿でも書かうと思ふたが、生憎原稿用紙は和倉に置いて來てトランクの中には無かつた。いま／＼しいがボカンと口をあけて、天井に對して寢そべつた。

夕方の晴れ間を見て、今から網を打ちに行きませうと云ふ。雨に邪魔されて、何かと憂さ晴らしの方法に焦慮してゐた智洞師は僅かの雨止みの時を利用して、早速切り出した。それツと立上る。

海邊は近かつた。前に横はる骨の様な島が死人島、左に見えるのがさゞえ島。死人島とは變ぢやないかと訊くと、私共も左様思ふてゐます。何とかして改名したいした

いで今日まで日を経たして來ましたと頭を搔く。昔、馬がたほれると、あの島へ持つて行つて埋めたものだと言ふ。それで其慶名を附けたんだと云ふ。それぢや死人でなく死馬島ぢやゴッヘんかと訊ねると、「さア昔の人は何と感違ひしたのか」と、流石智洞さんさへ合點がゆかなかつた。

どうして網を打つのかと訊くと、岸へとグルリと圍んで了ふのだと云ふ。村の小幡校長が何とかして私を慰める方法にと、自ら率先してザンプと海へ入り、今度は靜かに／＼と云ふ風で網を沈ませて行つた。續いて中山君、岩崎君などが反對の方向から此の方法を執つた。村一の素封家高橋翁は岸邊に立つて、何かと指圖してゐた。

網が外一杯に張られると、今度は中にある、長い棹で海の上を力任せに叩くんだと云ふ。見てゐた附近の悪戯小僧達は忽ち呼び集められた。かれ等はピシヤリ／＼と打つた。飛沫四方に散る。

「よしッ、おれも一ツ。」と、云ひながら萬が一もあらうかと寺を出て來るとき、海水着を肌につけてゐたから、手早く帯を解いて「オイ、その棹寄越せ」と云ひながら、

同じくビシヤリ／＼を續けた。下にゐる魚は其の音に驚いて、アタフタ逃げ様とする。網がどつこいしよと待つてゐる、と云ふ式だ。

最初は一匹も採れなかつた。一同面目のない顔を晒した。「今度こそは」と、次の場所で見事な獲れた。見事に適中つて、三匹の黒鯛がモノにせしめられた。うち一匹は可成の大きさであつた。これに力を得たか、今度は大漁だぞとフン張つた三度目が一匹も見出せなかつた。雨が又降り出した。夕暮れが次第に色をこめて來た。一同ぞろぞろと引上げた。

その夜、私の爲めに宴會を智洞師は催ふして呉れた。會するものは村の知識階級ばかり、それに高瀬翁加はり、寺島師列なり、橋本君座にあつた。歡題歡語の夜は永引いた。特に私の心を惹いたのは、先刻の黒鯛がチャンと我が膳上にのぼされてゐたことである。これは／＼と箸を下ろした。

「村の青年」と綽名を附けて遣つた梅田長一君、酒三更に入るの時、どうもおいらが親父はおいらを壓迫して困ると、新人の叫びを大に上げる。そんなことをなだめるこ

とのお手ものゝ智洞さん、「御説御尤も、さりながらですな」と、諄々と説く。村青悲鳴を上げて、「お師匠さん、もう解つた、解つた。明日から野に出て大に耕します。ワハツハツハ」と、梅田君の哄笑の聲は大きかつた。青年だ、力がある。

翌日、晴れたナと思ふと又降り出す。降つたナと思ふと、又晴れる。その晴れ間を見て、山入を訪問しやうと思ふた。

山入とは山田君のことだ。今から十四年前、私が一年志願兵として入營した時、同じ中隊にゐたのが此の山田君であつた。私の處女作「大學出の兵隊さん」には此の山田君がボツリ／＼あちこちに顔を出してゐる。「大學出の兵隊さん」は私の處女作であると同時に私の出世作である。あの本一冊の爲めに、私は今日あるを得たのであつた。思へば忘れむとして忘るゝ能はず、感慨の深いものがある。兵役の義務を濟ませてから、その時隊を同じうしてゐたものには悉く再會した。吉田にしろ、相野田にしろ、神戸にしろ、豊岡にしろ。

ひとり山田君には何うしても逢へなかつた。逢へぬも道理、こんな片樞の島にゐるとはよもやに思はなかつたからである。われ等再會すれば必ず山田のことが出た。「どうしてゐるだらう、どこにゐるだらう」と、互に洩らす言葉は同じであつた。

所が、測らずも昨日その山田君が次の村にゐて、今度私の來たのを知つて是非逢ひたがつてゐると云ふことを聽かされて、思はず驚喜した。私は全で今日まで尋ねあぐんでゐたものを探し出した様な悦びを感じた。その山田君は今、この能登島一の醫者として大成功してゐると云ふ。昨日も都合がつけば直ぐ來る筈だつたのが、何分商賣が醫者として、それに重病患者がゐるとかで、手放しも出來ず、それが爲め易々と來ることも協はず、困つてゐましたとも聽かされた。然し空さへあがれば、何とかして此方へ訪ねてゐらつしやるだらうと云ふことだつた。

先方は忙しい身、此方は今日もこの雨だ。何うして過さうかと案じてゐた位だから、一層のこと此方から出かけて行かうと決心した。さて困つたことには車がない。一々往復は船でするんだと云ふ。だから村で例令ば急病人が出來ると船で一里も彼方の山

田君の所へ迎へに行く位だと云ふ。それ程山田君は此の近在かけての名醫だと云ふ。

山田君萬さいだ。

即ち船を雇ふて、「村の青年」こと梅田君と、多田君、及び僕の總勢三人で出かけてゆく。梅田君は山田君とは同じい村の鰻目と云ふ所の生れだから、案内には持つて來いだ。

聽て船は岸についた、上がつた、歩いた。

見ると、彼方から洋服姿の三人が此方の方へ向けて歩いて來る。「山田さんぢやないか知ら」と、梅田君は一目散に飛んで行つた。然し間もなく歸つて來た。この村の校長さんと先生だつたと云ふ。「今から奥野さんをお訪ねする積りで來られたんだ」と云ふ。その奥野さんが見えたと云ふので、それではと一足先きに山田さんのお宅へ踵を返されましたと、村の青年は逐一報告した。

山入の家は直ぐ見えた。何故山田君のことを山入と云ふかと云ふと、兵營時代の綽名が左様だからだ。まるで入道の趣きがあつた。かるが故に山入と我等呼んだ。

後に山を控へて山田醫院は儼然と建てられてあつた。梅田君の案内で庭傳ひに直ぐ座敷へ来た。建てたばかりと見えて、木の香かすかに鼻を打つ。座敷を見ると、その昔いと美しかつたと云ふ山入夫人が一生懸命で座蒲團を敷き伸べてゐた。

「どうぞ、こちらへ。」

二人は此の聲で互に挨拶を交はした。

坐つた。最初に先刻の洋服の人々が見えた。

「私は當村の校長の松本貞二郎です。」

「私は訓導の福浦重雄です。」

「私は同じく米田弘之と申します。」

そこへ山田君が昔變らぬ髯面ゆたかに入つて来た。

「ヨウ。」

「ヨウ山入。」

「よく来て呉れたね。」

「山入、立派な座敷を建てたなア。天井がピカ／＼光つてるぞ。」

十四年振りで、いきなり逢つて、いきなり天井を口にしたものだから山入も面喰つて了つた。

「山入、君は猪退治の名人だ相だな。」

「ウン、今年は五匹とつた。」

「獵が好きなのかい？」

「好きよりか上手いものだよ。」

「そのお手並み見せい。」

「よしきた。」

彼は早速奥へ引込んだ。間もなく手に大きな皮を下けて出て来た。

「そら、どうだ。外のは皆他人に呉れたわ。これ一枚しか残つてゐないんだ。」

受取つて撫でゝ見た。實にいゝ手擦りだ。欲しいなアと思ふ。だけど山入は知らん顔してゐる。

「どうして獵るんだ。」

「前に獵犬が二匹ゐたらう？」

「ウンゐた。」

「あいつが冬になると、山中を駆け廻はり、そして貉を探し出すんだ。それをズドンと一發。」

「面白いだらうナ。」

「そりや。」

山入は茲ぞとばかり鼻うごめかした。おれは家のワイフの襟巻に土産としたら、どんなに喜ぶだらうと又撫でゝ見た。

まだん、話をしてゐたかつたんだけど、残念ながら約束の時間があつた。それは私の爲めに態々大仕掛けの獵を見せると云ふのである。遙か彼方の髣髴たる所にかすかに船影の幾ツか見える。そこに昨夜から網を下ろして、今日の興趣の爲めに準備してあるからと、今日智洞師から聽かされてゐたんだ。何とお禮申上げていゝやら。

大仕掛けも大仕掛け。その爲めに大きな發動機が特別に仕立てられたんだ。その發動機が野崎村に二時に入つて来るから其のお積りでと念を押されてゐたんだ。

その二時に時間が迫まつてゐるんだ。いつ再び山入と相見ることが出来るやら。私は笑ひの裡に、無限の哀愁をひそめた。

山入は岸邊まで態々見送つて来てくれた。學校の人達はゆつくり會談したいと云ふので、一緒の船に乗つた。山入は雨のそほ降る中を、ひとり寂し相にして我が家へ急いで行つた。

私には多年の望みたる山入に逢へたことが何よりの喜びだつた。何だか重荷を下した様な感情だ。

○

野崎の海まで来ると、もう發動機が来て待つてゐる。風は逆手を喰つて進みが鈍い。一同躍氣となつたが、これのみは如何とも仕方がない。彼方からは時々急がす様に汽笛の相圖がある。櫓を持つ男の額から玉なす汗だ。漸つと近づいた。ドヤ／＼と上が

つた。そこには村の高瀬翁を始め、小幡校長、中山岩崎兩訓導、新たに紹介された向田村の菅原校長、筆島西島兩訓導等、つまり能登島の知識階級は此の船に悉く網羅された。

最後の一人が足を發動機にかけた途端に早くも動き出した。行手は彼方に見ゆる點點たる漁船。次第に判然する。次第に人も見える。斯くて全く近づいて了つた。

「どうだ、るそうかね？」

智洞師は訊いた。

「さア、わかんねえト。」

眞黒な顔が向ふで答へた。

船七八艘、それ等の船には妙な菰かぶり見たいな物が一艘毎に必ず四ツ五ツあつた。何かと訊くと、あの中に入つて寝るんだと云ふ。私は其の一艘に乗り移つた時に眞先きになつてその一ツを覗いて見た。如何にも人ひとり優に横はることが出来る。雨が降らうが、雪だらうが漁師は此の中が唯一の安息所だと云ふ。

一同は好み／＼の船に移乗して、大漁如何にと眼を睜つた。愈々網が我等の到着を待ちかねたかの様子上げられたのである。高瀬翁は此の時御苦勞と云ひながら船頭がしらに五升入の大罫二本を手渡した。首はこほれる様な喜びで受けた。

見てゐると、網は各船毎に連絡して、手ぐられた。大きな目が次第々々に小さくなつて行く。つまり次第々々に中に入る魚は追ひ込まれてゆくのだ。小幡校長もいつしか其の引手の中に交つてゐるのに私は氣がついた。洋服をビシヨ濡れにして、漁師の手助けしてゐるんだ。私は昨夕と云ひ此の様と云ひ、無言の裡に他人の師表たる小幡校長に對して、敬ひで一杯の眸を送つた。一足一手に光あるとさへ思はれた。私は小幡校長は何んだか孔子の生れ代りの様な氣がした。

網の本元が愈々迫まつて来るに従ひ、魚の姿がチラホラした。私は「愈々だぞ」と思ふたから急に見張臺へ来て、一散に駆け上がった。この見張臺と云ふのは、若しや鮪などの大魚がウロついてゐるやしないかと、高所から見下す所だ。七八艘の中に見張臺は一ツだけあつた。網の目は益々細まつた。あゝ何たる壯觀、見る見る裡に魚と云

ふ魚、何百何千と云ふ魚は忽ち右往左往して遁け惑ひ出した。鯛だ、鯖だ、鰈だ、無
數にゐるのは飛び魚だ。

網全く狭められると、魚群はこゝを先頭とのたうち廻はつた。一二三のかけ聲で、
ザーツと一ツの船の中に流される様に入れられた。ピチ／＼と匆ねる音の騒々しさ、
いや面白さ。鯛は早くもグナリとなつてゐる。あとで聞いたんだが、鯛ほど弱いもの
はないと云ふ。既に海にゐる時、網の中のものになつたと思ふと早くもグナリとなる
と云ふ。引上げる間際には早や半死の状態、それが引上げるか直ぐ一番先きに參つて
了ふと云ふ。私は多くの魚の中から鯛のみをつまみ出して何だか氣の毒なことをした
様に思ふた。

鰈の奴、グナ／＼してゐる癖に仲々參らぬ。幾度空に翳しても、ピク／＼動いてゐ
る。大膽不敵の白者。

凱歌は學がつた。獲物の萬載された發動船は、夕陽で色彩られた海を眞二ツに割い
て、野崎村へと歸りを急いだ。恐らく此の日の此の學は生涯私には忘れ得ぬ印象であ

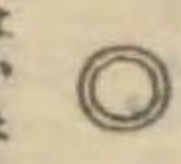
らう。

その夜、又私を正座に据ゑての盛んな宴會が始まつた。一同の名乗りが濟むと、互
の献酬だ。昨晚も左様だつたが、此の日も咽喉自慢の面々が狩り集められて、いゝ聲
をきかせて呉れた。顔と云ふ顔はどの顔も下足札みたいに汚なかつたが、その聲たる
や全く玉を轉がすの趣きがあつた。かれ等は「歌へ」と云へば直ちに遠慮柄なく大
聲を張り上げた。それがすつかり氣に入つて了つた。黙々たる小幡校長、温順しい教
育家らしい向田の菅原校長、私の心は和かであつた。小幡校長は縦來幾度他の小學校
に榮轉を勧められたが、地位は我が望む所にあらずと、堅く固辭して此の村に甘じて
ゐるんだと誰かゞ又聽かしてくれた。此校長の存する限り、この村の兒童からは一人
の不心得者を生み出さないであらう。

酔つたも酔つた。舊姓佐藤今は福浦玉雄と云ひますと、先刻名乗つた青年の顔が腫ろ
に眼の先きにかすんで來た。酔つてゐる證據だ。然し何と云ふ快よい酔ひであらう。

山海の佳肴、その中には先刻の鯛も交つてゐた。遁け迷ふてゐたあの時の可憐な姿

がチラ／＼する。美しい犠牲！　　ファイと其慶事を私は考へさせられた。



翌日の朝、羽織袴で此の村の村長前忠次さんが私の部室へ訪ねて来てくれた。先日
から實は村出身の兵隊の慰問に金澤まで出かけていたので留守にしてました、甚だ
相済まぬ、昨夜おそく歸つて来ました次第でと挨拶されて、却つて此方が恐縮してし
つた。恰度その時私はゴロリと大の字になつて寝そべつてゐた。そこへ突然殷勤な扮
装の姿だ。我輩大に狼狽した。村長の正式の訪問だから、敬意を表して、正座で相對
した。辭された後で、私は暫らく膝や肢を撫でた。近頃の私には正座は何よりの苦し
みであつた。

午後一時から、私の講演が此の寺の本堂で始まつた。最初村長の勅語朗讀、次に豊
原智洞師が立つた。

「この能登島には電氣がない、電燈がない、文明の餘澤にまだうるをされてゐないと
云ふけど、事實電燈が至る所にある。私の頭をこらんなさい。光つてませう。そこに
坐つてゐる空兵衛さんや、八助さんを御覽なさい。矢つ張りピカ／＼してござるぞ。
これ等晝なほ欺くばかりの中で、やがて奥野先生のお話があるんです。皆さん謹聽な
さい」と云つてから、演題の「三法」と云ふお説教が始まる。至る所から隨喜の聲が
高らかに聽える。

次に多田他家雄君、「奥野他見男さんと云ふ人」と題して、私を無精に擔ぎあける。
我輩幾度眼をシバ／＼させたことやら。

最後に僕だ。「人に優るの道」と云ふのだ。壇上に立つて四方を見ると、左一面には
各校長、先生、その他知識を求めんとする若き人々。ズツと前は悪戯小僧連。その外
全部殆んどお爺さんお婆さんで満たされてゐる。お寺で催されるお話だから、屹度あ
みだ如來を語るお方が村へ來たのと思ふたんだらう。それに向つて「諸君ッ」といき
なり浴せた。なんまいだ連中、キョトンとしてあつぺら顔して私を見上げた。

それから諄々説き來たり、妙所にいたりグツと四邊を睨むと、待ちかねてゐたかの
様に「なんまいだ、なんまいだ」と、口々に唱へた。何と云ふ佛教の盛んな島であら

う。「働く者に幸ひがありますぞ」なんまいだ。「佛の顔も日に三度ですぞ」なんまいだ。私は臍切つて以來こんな有難がられた講演をしたのは始めてだと思ふた。

私は悉く知識階級の青年への話として、講演の内容を整へて來た。だから爺さん婆さん連、何が何だか呆氣にとられたことであらう。それにも係はらず一人の座を立つものがなかつた。皆靜肅に謹聽した。どこかに得る所でもあつたらしい。

座の中央、柱の下に眼鏡をかけた妙齡の女が坐つてゐた。オヤ／＼鄙にも稀れなど、時々その方を見た。後で聽いたら、緩目の女先生だと云ふ。何となく聰明なまなざし。叢中のうちに一輪咲いた名花と云はう。

○

次の日の朝、早くも我々の姿は七尾行の發動船の上にあつた。見送つてくれた豊原師、高瀬翁、村の青年、中山訓導の姿がいつ迄も岩壁に佇んでゐた。

「向ふの方に校長が。」

微かに聞えた。見ると、遙かに右手にあたつて黒い姿が兩手を高く上げた。何かの

急用事で見送りが出來ないと聽かされてゐたが、どうかしてと遅れ走せに駆け付けて來たものらしい。顔は全く解らないが、赤誠は全身に漲つてゐた。敬虔にも身動きもせず、デーツと不動の姿で、訣別の意を表されてゐた。私には尊い氣がした。百人の見送りよりも一人の此の校長の見送りが、どんなに私に深い感動を與へたかも知れなかつた。

發動機の出發は仲々に手間取つた。それにも係はらず、校長の姿は微動だにしなかつた。私は胸の中で、思はず合掌した。

錨は上げられた。左様なら諸君。

私の眼からは能登島が一村野崎の風光は永遠に消え遣らぬであらう。殊にあらゆる厚意と款待の限りを盡してくれた豊原智洞師に心からお禮の辭を述べ。君、年齢未だ若けれども名僧の風格を備へ、その圓滿なる人格は自ら全村民よりの敬愛を受けて餘りあつた。われ測らずも、此の一島嶼の一漁村に來たり、かの並びなき良校長と、この比ひなき逸僧を發見す。喜び之に優るものあらんや。

秋になつたら

「秋になつたら逢ひませう」たつた其れ丈けの文句に過ぎなかつた。住所もなく名もなかつた。けれども男は解つた。

一日とて忘れたことがないと云ふ程思ひ詰めた女性、愛し切つた女性。それからの手紙だ。短かいうちに餘情滾々として盡きぬものがある。男は幾度繰り返して讀んだことか。

地下室の怪

今日は大變面白い所へ連れて行つて、君に材料を提供するとMが云ふ。
「面白いッてどんな所だい？」

「實は僕は非常な好奇心で、妾を欲しいと或る家で云ひ出したんだ。するとあると云ふ。どんな女かと訊くと、女學校を出たが、これから音楽學校へ入りたい。それには悲しいかな學資がない。その學資を得たい爲めに妾になりたいと云ふんだ。」
「そして君は其の女を見たかい？」

「逢つたんだよ。」

「どう思ふた？」

「いゝとも悪いともまだ判断を付けられないんだ。それに姉もあるんだがね、姉にも逢つたよ。お茶の水の女子高等師範出身だとさ。」

「フーム、怪しいものだね。そしてもう定めたのかい？」

「いゝや未だだよ。今日それを定めることになつてゐるんだ。」

「僕が一緒でもいいのかい？」

「構はぬさ。」

こりや始めて知る面白さだと僕はニンガリした。

「どこ、家は？」

「下谷だ。」

恰度その時二人は上野松坂屋前にゐた。

「乗らうか、歩かうか。」

「約束の時間が六時だから、まだ早いからブラ／＼歩いて行くことにしやう。」

「それぢや。」と、彼の行く儘に隨いて行つた。

「本當か知ら、音楽學校へなんて。」

「それを見破つて欲しいんだよ。」

「とんだ者に引ツかゝるんぢやないか。」

「ウン、それが心配だから、今日條件を出すんだよ。」

「どんな？」

「契約書見た様な證明書見たいなものだ。」

一、將來別れる際に決して手切金を要求しないこと。

二、如何なる場合と雖ども、毎月支給金の外に要求しないこと。

三、他に男を作らざること。

と云ふ様なものさ。そうして措かないと後に面倒が起つた場合に困るからね。」

「よく考へたものだね。」

「それ丈け用心してかゝらないと萬が一の場合と云ふことがある。」

「一體今行かうとする家は？」

「素人家だよ。」

世の中には裏には裏があるものだと思ふて、感心して了つた。

「まだかい？」

「もう直ぐだよ。」

大分歩かされた。然し到頭来て了つた。彼は突然に「此處だよ」と云ふが早い、つか／＼と一軒の家へ入つて了つた。恰度そこは直ぐ窓が道路に向つてゐた。中には机が一脚。汚らしい子供を身姿のいやしい眼のギョロリとしたおかみさんが脊負つて立つてゐた。

「今日はM君が云ふた。」

「ハイ。」と返事して、今見たおかみさんが玄關口に出て來た。

「御主人は？」

「只今一寸お風呂へ參りましたが。」と、キョロ／＼して二人を見た。男二人だから其の筋の者とでも思ふたんだらう。入れとも何とも云はぬ。

「實は今日お目にかゝる約束してあるんですから。」と到頭Mは此方から催促した。

「そうですか。ちや何卒おあがり。」と、漸つと安心したらしく云ふた。二人は靴を脱

いでゐると、そこへ美しい十七位の娘が現はれた。

「あれかい？」

おかみさんが向ふの方へ行つた際にそつとMに訊いて見た。

「違ふ。あれは此家の娘だらう。」

そう云へば、そんな様子があつた。應接續きに直ぐ家の中が見えた。佛壇が正面、部室の中はおしめやら子供の汚ない夜具でチラバラになつてゐた。

おかみさんつたら、髪を亂した薄氣味の悪い女だつた。

「此處ではナンですから階下へゐらしたら。」と云ひながら、ドン／＼先きに立つて案内した。地下室である。二人は變な氣になつて隨いて下りた。

「普通の家に地下室とは怪しい氣がするねえ。一體この家は何商賣だい？」

「結婚媒介所だよ。」

「媒介所？ フーム。」と、始めて打ち明けたMの言葉に吃驚して、今更の様にキョロ／＼と四邊を見た。地下室の階段から一階へ上つた所に、蓋をするように扉があつた。

つまり其處を蓋してさへ了へば、此の地下室で何をしやうと、外へ解る筈でなかつた。
「凄いなえ。」とMを顧みた。私はMと一緒にすればこそ氣強いものがあつたけど、若し一人だつたら迎ても入れるものぢやないと思ふた。いくら叫いても叫んでも、これぢや何うすることも出来ないと思はれた。良い意味に解釋すれば部室が少ないからと云ふ口實にもなるだらう。

そこにはテーブルと椅子があつた。煙草を燻かしてゐると、何かの用事で上へあがつて行つたMは「來てゐるよ、來てゐるよ」と、注進した。「よしきた」と私はムラムラと好奇心に唆かされて密つと上がつて見た。すると六疊の眞中にあつた机を圍んで、二人の女がゐた。横顔が姉らしい、後向きが目的物らしい。姉が小首を祕そめる様にして、ソツと何かを妹に話をしてゐた。直覺的に色々と入智慧をしてゐるんだナと思ふた。

「顔を見てくれたかい？」
「後姿で見えなかつたよ。」

など云つてゐる裡に、主人が歸つて來たらしい氣配がした。暫らくすると下へやつて來た。

「やアお待たせ致しました。」

五十位の年配。人が好き相に思はれるが、ハテどうだか。

「此方は私の友人です。極く親しくしてゐる仲ですから御遠慮なく。」と、Mは先方を安心させる爲めに云つた。

「そうですか。」と、ジロツと私を見ながら、

「本人が來てゐますから、どうぞ二階へ。」

それを聽くと、私は眞先きになつて階段を上がつて行つた。Mと主人とは一寸立話をしてゐたらしい。

二階へ來ると、部室が三ツあつた。その二間を覗いて見たが、誰もゐなかつた。三ツ目の部室、そこは子供の勉強室らしかつた。そこに向ふむきになつて卓上電氣の下に何か見てゐる女がゐた。コレだナと思ふた。

「どうぞ此方へ。」と、私は聲をかけた。女は其の聲で此方を振返つた。何となく凄さを瞬間に感じた。

明いた一室に坐つた所へ、女が入つて来た。そこへMも上がつて来た。二人も坐つた。女は顔を斜めにして俯向いた。その時は左迄に思はなかつたが、漸次よくなつて見えて来た。殊に身體の曲線が如何にも蠱惑的な魅力を持つてゐた。

何と話すだらうと見てゐるが、Mも女も黙つた限りであつた。そこへ主人と姉と云ふのが入つて来た。

私は姉をみた。實に一見曲者だツと思ふた。眼の中に悪辣が宿つてゐた。眼は斜めに鋭く釣り上がった何となくくち打ちの姐御と云ふ風體だ。これをお茶の水女高師とMは先刻云つた。どうしたら左様云へるだらう、思へるだらう。私の意見は最早此の瞬間に「不可」と決定して了つた。此の家のおかみの人相と云ひ、この姉と稱する得體の知れぬ者と云ひ、Mめ用心しなくちや危ないナと思ふた。坐つた所を見較べると御笑談にも二人は姉妹だとは思はれなかつた。何だか此の姐御が此の妹と稱する

ものを賣物喰ひ物にして、金にしやうと云ふもくろみが私の眼にハッキリ映つた様な気がした。

姉は坐るや直ちに朝日の煙草を出した。そしてスバ／＼燻んだ。その風情の悪どさ、凄い眼の使ひわけさ。どうしても一筋や二筋の女でない気がした。

Mは口切つた。

「先日約束した通り契約書を書いて貰へますか。」

「どんなんです？」

姐御の眼は光つた。

「どんなんですつて、先日云つたちやありませんか。」

「もう一度きかせて下さい。」

「云ひませう、將來いつ別れるに際しても決して手切金を要求しないこと。又、如何なる場合と雖も……」

「一寸お待ち、斯う云ふことは、さう堅く出るものちやありませんよ。何も證文を書

かなくつたつていゝぢやありませんか。」

「だつて先日書くと云つたぢやないか。」

「此方だつて、名譽も考へまさアね。論文出して妹を妾にしたなんて云はれたかアありませんか。」

すると主人は「まア、まア」と、慌てゝ横から止めて、

「折角の話がそれぢや。」と、なだめながら、M君に「階下まで一寸」と云ふた。Mの後から私も隨いて行つた。

「一體君あの女は何うした女だ？ 少し詳しく話をして呉れないか。」

「僕が此の間聴いたのは斯うだよ。何でも妹は一度結婚したんだとさ。そして今母と弟と三人で生活してゐるんだと云ふんだ。そこであの姉が嫁入り先きから、かれ等に毎月生活の補助費を出してゐると斯う云ふんだ。所で妹は音楽學校へ入りたいと思ふてゐる、本人の志望を果たさして遣りたい爲めと、弟が中學へ通ふてゐる學費を助けたい爲めとの理由で、妾にするんだ。これは自分の良人に堅く祕密。たゞし本人

の母親には話してあると斯う云ふんだ。」

「それは表面の口實さ。大體あの姉なるものと妹が何處が似てゐる。」

「僕もさう思ふ。」

「それに將來ウンと手切金を要求したいが爲めに、態とトボけて此處話はさう堅く出るものぢやないなどゝ逃げを打つたんだよ。而もあの風情で名譽も考へまさアねか何うだい。」

「さうだよ。」

「一體あいつが眞實女高師を學んだ者なら、どうして自分の妹を妾になどゝ提供出来るものか、常識を以つて考へて見い。」

「ウーム。」

所へ主人が遣つて來た。

「何とか契約書なんて云ふものを書かないで、うまく其處を。」と、出た。

「だつて書くとき先日云つたでせう。」

「イヤきかない。」

Mはキツと詰め寄つた。

「貴方は聴いてゐるたちやありませんか。」

主人はタヂ／＼として、

「よしんば聴いてゐた所で、先方では其廢物を残したくないと自分の名譽と祕密を重んじて云ふものですから。」

この言葉が曲者だ。大抵は斯う巧みに出られるとツイほだされるものだけど、Mは負けなかつた。

「イヤ何うしても書いて貰はなくちや、後日どんな脅迫を仕出かしてくるかも知れないから。」

「そんな事は決してありませんよ。私が證明しますよ。」

Mは軽く一笑に蹴つて了つた。あとで其の感想を聴くと、Mさんはあの女と結婚すると云ふたので、その仲介をしたに過ぎません、と強辯したら何うしますと説明され

たので、成程と思ふた。

「兎に角書いて貰はなくちや僕かイヤだ。」

「貴方も強張な人だ。」と、云ひながら主人は二階へ上がつて行つた。そこで私は云ふた。

「今度主人が下りて來たら、それほど云ふならあの條件は撤回しませう、と云つて見給へ。」

「どうして、それぢや大變ぢやないか。」

「まア、おれに任せろ。」

果して主人が來た。姉と稱する者を連れて。

「何とかありませんですか、斯う云ふものは四角い物でも丸くするのが。」と、例の口調が又始まつた。

「宜しい、それぢやあの條件は私が撤回させませう。その代りに外の穩かな言葉に代へますから。それは千人が見ても差支へないことですから。一寸下書を書きますから

お待ち下さい。」と、スラ／＼と次の如く書いた。

證明

- 一、本人は私の實妹なること。
- 二、本人に夫なきこと。

姓名

それを手渡して、「これなら如何です？」と、先方の一舉一動を見遁すまいと、女の態度を注意した。女は讀んだ。「本人は私の實妹」と、實妹まで來た時に、思はず實妹と口吟んだ。顔がサツと變はつた。それ切りモグ／＼と周章と投げ鉢を示して、

「兎も角、斯う難かしく云ふのなら止ませうよ。」と、出た。果して彼女の妹でないことがハッキリ明白に此の時に解つた。

「これには何を殿と男の名を書かないんですか。」と、主人は訊いた。

「書かないんです。此方の名前を知らせたくはないんです。」

「ちや女の名前も當然書く必要はないでせう。」

「書きたくなければ書かないでも宜しい。」

「相手の名宛を書かずに、此方の名を書く必要はないんですからねえ。そんな證文なら何枚書いたつて差支へないでせう」と、主人は女に云ふた。此方は本人の自筆さへあれば何うにでもなる。たゞ此の二條件さへ書いて見ればいと目的は外にあつたから、この點は讓歩した。

「次に主人に云ひますが、主人には次のことを書いて貰ひます。」

何某をお世話申上げ候上は、萬一本人に不都合有之候際は萬事小生に於て引受け申可く念の爲め一札如斯、どうですか。」

「私からそう云ふ證文を取る位なら、女の方からは何も貰ふ必要がないでせう。」

「ある。」

「どうしてあるんです？」

「まア後に解ります。ちや斯うして話をきめました。どうか直ぐ之を書いて下さい。」主人は上へあがつて行つた、程もなく其の通り書いて持つて來た。

「宜しい、今度は貴女にその文句を書いて貰ひませう。」

女は止むを得ぬと許り、そこで巻紙を擴けて下書きを見い／＼書いた。書き終つてから其れを此方に渡した。私はヂーツと見た。この筆蹟で女高師出身とは何處を押したら其麼文句が出るかと思ふた。

「御主人、一寸來て下さい。」と、其の座を外さうとすると、女は「いゝえ、私の方が立ちませう。」と、行つて了つた。

「一寸伺ひますが、今の女は女高師出身だと云ひましたね。」

「さうです。女高師を中途まで學んだ人です。」

「嘘だツ、此の筆蹟を見ろ、女高師に學んだ女の字か字でないか一遍で解る、M君これでも君は女高師出と信ずるか。」と、M君をも見た。M君は夢から醒めた様な顔をした。すると、窮鼠猫を咬むと云ふのが、俄然主人の態度がガラリツと變はつた。

「貴様等おれを侮辱するかツ。」と、威丈高になつた。

「何が侮辱だツ？」

「既に證文まで書かしておいて、今更字體が何う斯うのと、それは屁理窟だ。馬鹿ッ、おれは之でも以前は政治家だぞ。貴様等如きに侮辱されてウゝヌ。」と、自分の書いた證文をピリ／＼と引ツ裂きながら、眼を虎の如く怒らせた。

「斯う云ふことで文句を云はれると、何と云ふてオメ／＼あの婦人に申譯が立つかツ。態々呼び寄せて今更どう返事が出来るかツ。貴様は何だ。貴様は黙つて居ろ、貴様が妾に持つんぢやないぞ。何を生意氣なツ。」と、私に喰つてかゝつた。するとMは其れを引受けて、

「大體この話に嘘があるか何うかを試験して見たんだ。嘘があるぢやないか。」

「嘘？ よしんば姉に嘘があるにしろ、本人に係はつたことぢやないぞ。それを無理の理屈をつけやがつて。」

「相手の係累を調べることは、此方にとつて重大なことだ。何が侮辱だ。おれは今まで君を信用してゐた。その信用した人間が確かに女高師と云ふからさうかと安心して乗ツかゝつた舟だ。それでも君は云はぬと云ふか。」

「ナニ、おれを信用してたッ。信用してゐたものが此の通り證文を書いたのなら、こんな確かなことはないぢやないか。いざと云へば萬事引受けると迄書かしながら、何たることだッ。」

「だから其の信用した人間の言葉が全然ひっくり返された以上は、總てに疑問を抱くのは當然だ。」

「女高師の者は字が上手と限つたものかッ？」

「限つたものとは云はない。然し苟しくも全國から選抜に選抜された一粒選り揃ひだ。及び女高師には女高師の型がある。なんだ此の字は。まるで尋常科漸つと出と云ふ字ぢやないか。此の一事で萬事が解つた。裏にどんな細工があるかも知れぬ。」と、Mも今は負けなかつた。

「なにッ。」あはや彼は拳を堅めて喰つてかゝらんとした。そこへ姐御が煙草を口に啣へながら、下りて來た。

「何を愚圖々々此の野郎共云つてやがるんだ。」と、ガラリと調子を代へて出た。その

態度は、姐御と云ふよりも、寧女ばくち打ちの親分と云ふ風だつた。もう何もかもバツて了つたと云ふ捨鉢氣分だ。

「てめエ達、鼻をあかしやがつたね。覺えてゐる。唯の女だと思ふてるのかい？」と、椅子でなかつたら胡座を掻く所だ。

「そうだ、大に怒つてやつてくれ、どなり付けて遣つてくれ。」と、事が九分通り成就を見せて、最後のドタン場になつて、暴露されて了つた悔し紛れに主人はタキつける様に云つた。

「てめエ達に嘗められる様な女と女が違ふんだよ。何だつて。上でまいてゐりや女高師が何うの斯うのと、大きなお世話様ぢやないか。世渡りには世渡りの法があるんだよ。シャレくせエーこと云はないでおくれ。」

僕もMも餘りのことに言葉も出なかつた。もう斯處所に長居してゐりや、どんな危難に遭遇するかも知れぬと思ふたので、私は密つとMの脊中に相圖をしながら、立上つた。

「お待ちよ、どこへ行くんだい。」これが女の聲だ。

「便所へ行くのに止めると云ふのか？」

女は流石に黙つて了つた。私はツカ／＼と上がつて行くと、恰度そこに妹と云ふのが手持無沙汰にボカンと立つてゐた。この女は人相から見ると善良らしい。この善良がああ姉御と云ふものに、まるで雀が鷹に捉はれた様に何うすることも出来ない羽目におちいつてゐるらしい。それともあの虫も殺さぬうちに針でも啣んでゐるのか。

「貴女は女學校を出てゐる位なら、自分を活かす道を選ぶこと位は出来るだらうに。何を好んで此處。」と、云つてゐる所へ、おかみが奥の方からノコ／＼怪訝相にして出て来た。

「一寸主人を呼んでくれ。」

おかみは奇怪の地下室の上へ来て主人を呼んだ。主人とMとが一緒になつてあがつて来た。あの地下室を閉ちこめたが最後、どんな手段が講ぜられるやも知れないから外へ飛び出すに便利な所へ難を豫め避けてゐた方がいゝと思ふたので、態と左様し

たんだ。一階まで来ては、主人は地下室の様な大聲を流石に出せなかつた。前の往來の人通りや、近所鄰への慮りが流石にあつた。それでも「怪しからん、怪しからん」と、睨め付ける様にした。私は「早く歸らう」と、Mに眼配せした。Mは財布を出して、どれ丈け置いてゆけばいゝかと迷ふて一寸私の顔を見た。私は片ツ方の五指を大きく擴けて顔を撫でゝ見せた。Mは合點した。

長火鉢の前に主人とMは坐つた。主人の怒聲を軽く受けて、「色々有難うございました」とMは冷かに云ひながら、その紙幣を、下に置いた。主人はチラと其れを見た。急に憤激りの聲が小さくなつた。

そこへ姉御がドカ／＼と上がつて来た。主人は金の力で一旦は弱まつたが、姉御の手前又猛り立つた。姉御は今しも刃物でも出す様な眼付きでツツ立つた。

二人は生きた心地もなく、慌てゝ靴をはいた。あはや後からグワンとやられ相な氣がしたので、いきなり帽子を手にするが早いか、倒れる様にして外へ飛び出た。そしてあいつ等が追ひかけて来る様な氣がしたので、思はず一町ばかり息セキ遁け走つ

た。そして漸く後を見た。誰も来る様子がないので漸つと歩調をゆるめた。それでも全く安心が出来ず、幾度も後を振り返つた。

「妾なんて、碌でもないことを仕出かさうとするから、こんな目に遭ふんだ。」と、散々私はMに愚痴つた。

「だつていゝ材料ぢやないか。又と得られない材料だろ。」と、Mは苦笑して私を見た。

「一體どうして彼處所を見つけたんだ。もう少し自分を持することを考へなくちや。」と、たしなめると、

「もう何も聞いてくれるな。」と、Mは悄然とする程悲觀して了つた。

久振りの箱根

大磯に滞在中、突然遊びに来るた三谷さん姉妹を誘ふて「今から箱根へ行かうか」と云ひ出した。云ひ出すが早いか直ぐ其れを實行するのが、何とも云へぬ愉快だといふのが私の性分だ。

妻に子供の二人を併せて、總勢六人は、口を切つてから卅分と経たぬうちに出かけた。東京から箱根と云ふと、遠い感じがするが、大磯からは直ぐであつた。卅分を汽車に乗り、後の四十分で湯本まで電車。それから愈々箱根だ。箱根と云つても長い。強羅まで行くにさへ登山電車で、又一時間近くもかゝる。恰度汽車を下りて、湯本行に乗換へた刹那であつた。思はず其處に平田君の夫人が乗つてゐるので、吃驚した。

「やア暫らく。平田君は？」

夫人には、いつか四五年前鎌倉で一度逢つた限りだつたから、急に思ひ出せなかつ

たらしい。然し私の顔を繁々見つめてゐる裡に氣が附いたと見えて、
「まあ」と吃驚した。

「平田君は？」

「いゝえ、母と二人限り、それに此の親類の子供と。」

平田君と云ふのは、私の無二の親友であつた。家へは殆んどお互に訪問こそしないが、外では始終逢つてゐる仲だ。どうして來なかつたんですと訊くと、會社の方が忙しいものですからとある。今から強羅の星別荘へ行くんだと云ふ。それちや都合がよかつた、私共も一寸あの別荘へ立ち寄つて見るつもりだつたんですからなどと云ふ。
「ちや今晚お泊りでせう、先方で。」

「いゝえ、今日かへるんです。」

「それちや詰らないぢやありませんか。」

「でも、二人の婦人を選れてゐるものですから。今晚かへると云つて出たんですから。」

「まあ折角お連れが出來たと思へば。」と、惜し相に平田夫人は云つた。

登山電車に乗つて、登り出すに従ひ、次第に箱根らしい雄大な眺望が擴けられてきた。山の姿、水の流れ、巖のたゞすまひ、雲の往來、展開毎に歡喜のとよめきが擧がる。私及び家族は幾度も箱根は知つてゐるが、茲四五年たづねなかつた爲めか、新たな感興頻りに湧いた。三谷さん姉妹は始めてであつた丈け其の恐悦は甚だしかつた。他の乗客の手前聲こそ露はに出さなかつたけど、顔にはマザマザと感激が浮び出てるた。

「來てよかつた、よかつたわ。」

「どうです？」と訊く毎に彼女等は唯そう云ふて萬感を胸に秘めた。

終點、強羅に着いて、直ぐ又ケーブルカーに乗つて、早雲山に登つた。一軌り毎に景は大きく展ばされた。全く登りつめた所は、何とも云へぬ景色だつた。雄大であるが上に豪壯な趣きがあつた。

そこには茶店が幾ツかあつたが私は躊躇なく驛前直ぐ左の一福を選んだ。明け放た

れた座敷を通して、かなたの山や森が指呼のうちに見えたからだ。そこで飲んだ芳茶のうまさ、又羊羹の味のよさ。三谷姉妹は此處所は生れて始めてだと云ふ。

「オヤ、何でも出来るらしいね。こんな事なら態々おひるの辨當なんか汽車で買つて来るんぢやなかつた。」と、四邊を見廻しながら云ふた。そこには親子井でも何でもあつた。用意して来たサンドウィッチは机上に載せられた。一同おながが空いたくと云ふて喰べた。

「長尾峠へ行くといふんだが。長尾峠から見た富士は日本一だ。」

「遠いの？」

「自動車で二時間もかゝるだらう。」

「そうすれば今晚かへれないわ。」

「歸れることは歸れるが、雲があつたら何にもなりやしない。」

「行き損になつたら大變だわねえ。」

ぢや大涌谷の硫黄噴火口を見て來ようかと云ひ出した。また登ること十數町。そこ

で濛々たるものを見て、それから蘆の湖へ下らうかと云ひ出した。

「歩けるか知ら？」と、二人の姉妹を見ると、

「そりや歩けますわ。」と、弱い癖に氣焰だけは負けなかつた。

行かうか行くまいかと案じてゐる所へ、「ヒドい目に出遭つた、ヒドい目。」と云ひながら、ゾブぬれになつた二人が上から下りて來た。

「噴火口のあたりは大雨です。それに風の強いつたら、吹き飛ばされ相でした。」と、ヒイヒイ云つてゐる。

「そんなにヒドい風ですか。」私は問ふて見た。

「とても大變です。」

「ぢや行かれませんですね？」

「えゝ行かれませんとも。」

行かうか行くまいかに迷ふてゐるのが、斯う聽いては女子供を連れてゐる手前、厭でも應でも思ひ諦めねばならなかつた。では今度はケーブルカーで下りることを止

めて、下まで歩いて行かうと云ひ出した。森の中の小徑をたどることは、一入興が深い様に、誰にも思はれたのであつた。「それツ」と、立上る。

徑は茶店の右から始まつた。最初は一寸迷ふたが、直ぐ可成の廣さの道に出た。石がゴロゴロしてゐる。ぶらり／＼と進んだ。花があれば花を摘んだ。蝶來たれば蝶を追ふた。所々キャンプ生活をしたらしい火を燃やした跡がある。美しい別荘が下へくるに従ひ、あちこちの森の中に見えた。

強羅公園の中へ入つた。いつ來ても美しい池の水、芝生の色。三谷姉妹は何もかもにスツカリ魂を奪はれて了ふ。斯くて星別荘へと遣つて來た。その大廣間に案内されて、何よりも先きにと、まづ湯に入つた。一浴疲れが癒されて了つた様に、とろりとする。湯の有難味は之れだと思ふ。

平田夫人は？ と訊くと、向ふの座敷だと云ふ。途端に姿が見えた。

「奥様、此方へゐらつしやいませんか。」

「ええ。」

夫人は一寸奥へ入つたかと思ふと、カステラを大きく切つて澤山持つて來た。

「おあがり下さいな。」

親切だ、おいしい、眞心があると、各自に口を動かした。お泊りになればいゝのに又出る。そのうち雨がバラ／＼と降り出した。雲がグ／＼かなたの山に伸びてゆく。

その小晴れを見て歸ることにした。

電車が、塔の澤で止まつた時、試みに外を見ると、雨がやんでゐた。

「皆、おりろ、おりろ。」

皆が下りたら、又降り出した。こりや不可んと再び電車の中へ戻つた所、今まで坐つてゐた座席は皆他の客に占領されて了つてゐた。ボカンとした顔で、釣り革にブラ下がるの醜態。再び外を見ると、又晴れた。座席を占められた腹癒せに、又下り様と云ふて、ドヤ／＼と下りた。何故か其の時に限つて、その電車の停車に永かつた。

そこから見た箱根は又何とも云へなかつた。深い／＼溪間から、仰ぎ見る山の頂きまで一望に收められた。あの中腹を蟻の様に縫ふてゆくのは旅人か。

坂を一町ばかり下ると、そこが宮の下だ。私は宮の下が好きだ。一番箱根らしい気がする。町をブラ／＼行くと、富士屋ホテルの前へ来た。「どうだ、入らうか。」

私は一同を振り返つた。
「止ませうよ、こんな風をしてゐるんですもの。」

「だから却つていゝんだよ、如何にも我々が箱根に別荘があつて、一寸散歩かたく出て来たと云ふ風だから、身分が解らない。生じつか盛装を凝らしてゐるよりか、この方が何となく餘裕綽々に見えるんだよ。」

「だつて。」
「構ふものか。」

富士屋ホテルは日本一の高價いので有名だ。その代り、その素晴らしさ。大抵の者は先づ度膽を抜かれて了ふ。

名高い朱塗の橋を渡ると、流石にヒヤリとする。四邊のたゞすまひ迎ても我々風情を納れ相にもない。然し日本中のホテルと云ふホテルは殆んど潜つてゐる私は存外平氣に構へて真先きに立つた。外の連中は何しろ此の方面の物識りがあゝ云ふ風だから、後から隨いてさへゆけばどうにかなるだらうと、ビク／＼しながらも引かされて来た。玄關からは、直ぐ二階へ上がる様になつてゐた。見上げると、眞赤な絨氈だ。そこにあつた草履を引ツかけて、ツカ／＼と一同上へあがると、奥からボーイが飛んで来た。その時チラツと私は中を見た。休憩室の淡紅色の安樂椅子には美しい外人の幾群れかどつかと腰を下ろして樂し相に物語つてゐる。部室と云ひ、人と云ひ、流石は音に聞えた富士屋ホテルだなアと頭に閃めいた。

ボーイは何故か挨拶もせず、吃驚した様に我々を見詰めた。何と云ふ羨の悪いボーイだらうと思ひながら、

「コーヒを飲みに来た。」と云ふた。すると彼は急に聲をひそめて、
「實は素足の方は。」と、足元へ眼を凝らしたので、おれは思はずハツとして、グウの音

も出なかつた。之れには抗辯の仕様もなかつた。

外人のゐる席で、素足を見せると云ふことは非常に失禮なことになつてゐる。其れを指摘されたのだ。皆まで云はなくても私には「素足の方は」のみで早くも氣が附いたんだ。そんなことを充分知つてゐながら何故そうした風で入つたかと云ふと、箱根みたいな遊覽地のホテル位は、そんな事は大目に見てくれるだらうと思ふたからだ。都會と違ふと云ふ此方には頭があつたのだ。然し不可ぬとあれば仕方がない。それぢやと引下らうとする、「お茶だけならグリルの方へおいで下さい。グリルなら其の儘で差支へございませんから。」と云ふ。

「ぢや其のグリルは？」

「別の入口があるんですが。……でもお入りになつたんですから、此方から御案内いたします。」と、云ひながら、ボーイは我々の脱いだ下駄をつまみ上げる様にして持つて上がりながら、自ら先きに立つた。

我々は別にコーヒだつて飲みたくはなかつたのだ。たゞ富士屋の中さへ一寸見れば

其れで足りたのであつた。今ボーイの後から隨いて行くと、先づ第一に眼についたのは硝子越しに見た後庭の美しさであつた。巖と云ひ瀧と云ひ、風雅な裡に壯麗を兼ねた氣品深いものであつた。そこには又新婚らしい外人の男女の二人が、何か濃まやかに物語つてゐた。彼等は我々の足音に思はずも振り返つて見た。そしてかれ等に取つては夢想もしなかつた失禮な素足の連中がゾロ／＼とボーイに引ずられてゐるのを見て微かに侮蔑を思はずにゐられなかつた。天つ晴れ箱根に別荘を持つた意氣込みで堂々乗り込んだ一同の時だけは穴に入りたい氣持ちで遁ける様に足を早めた。

ボーイは遠慮柄杓なく遇してゆく。みじめなる哉われ／＼は割烹所の廊下を引ツ張られる様にされた。そこは逆でも客などに見せられる様な所ではなかつた。料理を造つてゐる場所だから肴の骨だの、野菜の尻ツ尾などが捨てられてゐたのみか、ボーイ連の傷だらけの食卓には漬物などが山盛りになされてあつた。表に引代へ、一端裏へ廻はると、何と云ふ淺ましい汚なさであらう。私は見てはならぬ所を、この偶然の出来事から、眼に入れたことを、却つてどんなに喜んだか。富士屋ホテルが何だと思ふた。

幾人かのボーイ連の、さけすみの眼を後にして、最後に来たのが、グリルであつた。そこは先刻の正面から見たあの休憩室と較べて、似ても似つかぬ薄つべらな感じの部屋であつた。場末に見るカフェーみたいだつた。その席附きのボーイが眠つてゐたらしい、起されてキョトンとしたが、大勢の姿を眼にして吃驚慌て、脱ぎ捨てゝあつた上衣を身につけた。部屋はガラんと他に一人もゐなかつた。

「これで客があるかね？」

「え、夕方頃から随分見えます。」

「もう少し何とか裝飾してもいゝんだに。」

富士屋のグリルと名づくには餘りに見劣りがした。

コーヒを飲んだ。うまいが高價にも高價かつた。箱根だ、富士屋だ、文句も云ふまい。

立上ると、「おかへりですか」と訊く。顔いて見せると、先刻のあの正面の入口と比べて、全で臺所口みたいだ。そこから追ひ出される様に、外へ出て了つた。

女連の私を恨むこと。「こんな恥を掻いたことはない」と云ふ。「何も経験だよ」と慰めると、こんな経験は二度と繰返したくはないと播す。然しおかけさまで富士屋の臺所を見られました、と皮肉なのか、本當に云ふのか。

それから中田と云ふ日本でも有名な骨董店へ来て、立ち止まつた。外人相手に賣るだけあつて、珍奇な様々があつた。私は玄關からチラリと見て、奥の方に如何にも見事な鎧があるので、「昔あれを着て戦争をしたんだよ」と、子供に説明してゐるうちに、自分で感興を催うしたので、ツイ熟視したさに、ツカ／＼と下駄を脱いで中へはいつた。すると奥から店員が出て来て、叮嚀に一揖しながら、草履を並べてくれた。今更に逃げるに逃げられず結構なものがありますなアと、フイと口から洩らしたのが失敗だつた。「此方にもございます、こちらにも」と、だん／＼奥へ引ッ張られ、最後に山河溪谷一望の休憩室へ連れ込まれ、うやく／＼しくお茶を出される仕末。まさか鎧だけその一寸とも云はれず、

「實は箱根へ行つたら、何を措いても中田を覗くと云はれたものですから。」と、當す

つほなことを云ふと、

「誰方が仰しやいました？」

斯う云ふ店へ来る者は先づ千萬長者の富豪以外にはあるまい。それを誰方と云はれてグツと詰まつた。仕方なしに、「僕の友人が」と答へた。斯う云へば模糊としてゐて掴み所がない。更に此の中田では素足が大に功果多かつた。屹度別荘へ来たのか、さなくば何處か宿に泊まつてゐる執方かだと思ふたに違ひなかつた。若しも洋服に靴と云ふ姿だつたら必ずや其の日歸りと見込まれたであらう。

恰度幸ひ、外から大きな聲で、

「父ちゃん歸らうよ。」と、日出子が喚かした。それをキツかけに、

「今、子供を連れてゐて、ゆつくり觀賞することが出来ませんから、何れその裡ゆつくり見せて頂きませう。」と、澁澤男爵みたいに鷹揚な口を利いた。

「どうぞ、是非又。」と、飽く迄も先方は叮重だつた。私は這々の體で外へ出た。「うかうかと冷評かしにも入るものぢやない。」と、悲鳴を上げた。

「さ、歸らう、歸らう。」と、小雨を突いて、戻つて来た。皆のお腹が可成空いてゐたことは百も承知だつたけど、私は如何にも氣の利かない風をして、停留場まで引上げて了つた。箱根でウカ／＼物も喰へぬと思ふたからだ。

その代り、聽て小田原に着いてから、一同は喰べたいと思ふてゐた洋食で、ウンとお腹を膨ませた。

「どれ丈け取られるやらとハラ／＼して箱根の宿屋で喰べるよりか、此の方がどんなにいゝか知れませんか。」と、皆は肩の重荷をおろした様な氣分で口を動かした。大磯にゐて毎日肴ばかりを喰はされてゐた僕たちには、その日の洋食は實際又うまかつた。

大磯へ戻つたのは夜の八時。楽しい一日であつた。

雑感

◇毎日の夕方が楽しみだ。今日は洋食にしようか、日本料理にしようか、天ぷらか、鳥肉か、様々を其の日に喰つて廻はつてゐる。
◇だから、殆んど家で晩飯を喰つたことがない。いくら御馳走があつても喰ふ氣にはなれぬ。場所が變はらねば承知が出来ぬのだ。これを氣分と云ふのだらう。

◇酒を飲むと、よく眠られる日と眠られぬ日とある。よく眠つた翌朝の氣持ちよさ。この筆方を以つてすれば酒は藥でもあり毒でもある。

◇人間は年齢をとるに従ひ、色氣よりも喰ひ氣だと云ふ。近頃その感の深い所から察すると、おれも人並になつたものと見える。若い時が面白かつた哩。

名畫家の苦笑

暫らく。お變りなくお暮らしの事と存じます。久振りで上京致しました。お差支へなければ是非一度お逢ひ致したいと存じます。御都合如何でせう。お手すきでしたら、お返事頂きたうございます。

電話をかけて頂いても、若し留守ですと失禮ですから。でも朝十時迄は大抵居りますから、若しかけて下さる様でしたら、午前十時頃迄にお願ひ致します。以前の事は何事もなくして了つて、改めてお友達として、お目にかゝりたいと存じます。いづれお目にかゝつてからお話致しませう。亂筆おゆるし下さいませ。

佐原須賀子

電話神田何々

石井は或日多くの郵便物の中から、この一通を見出した時にハツと思ふた。二度も

繰返して讀んだ。五年前のことが髣髴として眼の前に展開された。

五年前、美人畫を描いては當代一品と云はれた石井は臺灣の一人の未知の女から手紙を受取つた。手紙には自分は今いやしき藝者つとめをしてゐると云ふことを書き、それに寫眞を添へてあつた。石井は寫眞を見た。臺灣みたいな所に、こんな美人があるかと思はれた。何となく好感を持つた石井は、それに對して直ぐ返事を出した。再びきた。出す。手紙の往復はいつしか繁かつた。

それから暫らくして突然神戸から手紙がきた。何うして神戸まで來たんだらうと、石井は不思議がつて披けて見た。すると斯う書いてあつた。

「あなたをお慕はしさの餘り、到頭藝者を止めて實家へ戻つて來ました。直ぐにも上京したいんですが、御都合いかゞでせうか。斯う云ふ風情をお目にかけることは何んだか恐ろしい様にも思ひますが、でも嬉しい氣がします。お返事下さいませ。」

石井は本當に自分の爲めに藝者を止めたかどうかは疑はしかつた。でも左様云ふことを書く丈けでも、自分に對して熱心であることは人のよい彼として認めない譯にはゆかなかつた。彼は直ぐ承諾の手紙を出した。先方から幾日何時に新橋驛へつくと云ふ返事がきた。その日の朝、石井は身姿を繕ふて、驛にて彼女を待つた。石井は様々に彼女を想像して見た。自分の期待を裏切らない女であればいゝことを内心冀ふてゐた。

汽車がついた。ドヤ／＼と乗客が下りて來た。最後近くになつて、寫眞で見覚えのその女が遣つて來た。眸が合つた刹那、男は彼女だナと思ふた。女も石井には直ぐ氣が附いた。期せずして二人は近付いた。

「疲れたでせう？」

ニコ／＼しながら女に聲をかけた。

「いゝえ。」

素人らしく作つてはゐるものゝ、矢つ張りどこことなく素人放れのしてゐることを石井は感じた。

「まだおできが充分に治らないの。」

手紙で、今おできが顔に出てゐる。その顔を見られるのが恥かしいと云つて来てあつたのだつた。

「少つとも目立たないぢやないか。」と、石井は強ひて無頓着らしい返事をしたけど、チラと悪性のもものぢやないか知らと胸に掠めきを覺えた。女はその傷を見せては感じを悪くすると思ふたのか、ハンケチで時々蓋ふ様にした。自分と云ふ美觀をこの爲めに相手の心に傷けやしないかを慮はかつた。

石井は兎も角もと、彼女を自動車に乗せて、かねて二人が日々逢ふのに都合のいゝ宿をと選定しておいた其處へ案内した。男の割合に冷やかなのに反して、女は恰も全生面を擲つたかの様な情熱の態度で石井を遇した。その爲め彼の心は次第に女のものになつて行つた。或る日二人は三越へ仲よく出かけて、測らずも彼の妻子に發見されて、飛び上がる程窮したりした滑稽もあつた。石井が私に話した其の時の光景をザツと書いて見る。

三越へ入つて、あれやこれやと眺め、やがて歩を移さうとして、思はず石井が前方

を見た時、自分の妻が子供を連れて、此方へ歩いて来る姿がサツと眼についた。慌てて姿を隠さうとしたけど、及ばなかつた。妻の眼には敏くも彼の姿が宿つて了つてゐた。そこで石井は女に「大槻の妻だと云へ。子供一人だよ、麴町だよ。」と、手早く耳打ちした。大槻とは石井の先輩の畫家で、今日の成功まで石井は可成の世話になつてゐた。妻はツカ／＼と進んできた。

「こちらは大槻さんの奥様です。」と、石井は形勢不穩なる妻の前に、慇懃に紹介の勞を執つた。妻は怪しいナとは思ふたが、さう云はれて、うかつに疑ふ譯にはゆかなかつた。そこで、

「まア左様でございますか。一度お眼にかゝりたいと存じてゐました。只今どちらにお住ひでゐらつしやいますか？」

「ハア麴町です。」と、突嗟に効を収めた。

「お子供さまは？」

「え、一人ゐます。」

「お坊ちゃんですか、お嬢さまですか？」

彼女はグツと窮した。窮すれば然しながら通じた。やぶれかぶれに、

「男です。」と、云つた。それが見事に適中した。

正直に云ふと、石井の妻君はよく大槻の家庭のことに就いては知らなかつたのだ。

だから、それから色んなことを聞いても、それが嘘だと断定する譯にはゆかなかつた。

「今日突然日本橋で出合つたものだから。もう少し中を御案内するから。」と、云ひながら石井はサツサと妻と別れて了つた。

「まア、あたしどうしやうか知らと思ふた。だつて大槻さんてどんな方かサツパリ知らないんですもの。」

「危ない、危ない、然しまアよかつた。」と、云ひつゝ出口へ來ると、そこに石井の妻君が怖ろしい顔をして彼を待つてゐた。石井を見ると、

「もう御案内が済んだでせう？」と云ふた。

「ウン。序でに一緒に大槻さんの家へ行つて來るから。」と、サツサと先きになつて出

て了つた。

石井の妻は若しや、本當に大槻の妻であつたなら、石井がさうして厚意を盡すのが從來の好意に對して、普通のことだと思ふて、疑ひは抱きながらも、無理にそれを止める譯にはゆかなかつた。

その夜、

「あの方ほんとに大槻さんの奥様？」と、石井は妻君から念を押された。

「本當だとも。もう少し柔かく應對すればいいのに、少し失禮だつたよ。」と、態と石井はブーンとして見せた。

然るに其の翌日、彼が例に依つて、寫生に出かけて夕刻歸つて來ると、妻君は恐ろしい顔をして彼を待つてゐた。

「貴方つたら、私を何と思ふてゐらつしやるんです。あれが大槻さんの奥様だつて。フン。あまり女だと思つて馬鹿になさるものぢやありませんよ。」

「大槻さんの奥様だよ。」

「まだ白ばくれてゐるんですよ。今日私大槻さんの家へ訪ねて来ましたよ。」
「ちや家はどこだい？」

「麹町からお移轉りになつて小石川表町でしたよ。」

石井は何うして、それを調べたかと仰天して了つた。

「大槻さんの家に行つて、奥様にお目にかゝりたいと申して、出てゐらした方を見ると、昨日の女と全つきり變つてゐるぢやありませんか。奥様ですかと念を押すと、さうですと仰しやる。一體昨日のあの女は誰です。どこの夫人です、私をどうしやうと云ふんです。」と、胸をとらむばかりの權幕。石井はグウの音も出なかつた。

「夫人ぢやない藝術家だよ。」

「嘘おつしやい。そんなに私がイヤになつたんですか。イヤになつたのなら何うでもしたらいゝぢやありませんか。あんな藝術家があるものですか。本當に藝術家なら男ですもの。私何も云ひませんわ。」

「屹度云はぬか。」

「云ひませんとも。どこの夫人と貴方は。」

「ちよ、ちよつと待つてくれ。」と、石井は本箱の奥深くに藏ひ込んであつた彼女の寫眞を漸く見出して、

「忘れたかい、そらいつかの臺灣の藝術家だよ。」

妻君は取る手おそしと穴のあく程それを見詰めた。寫眞に偽りがなかつた。彼女は怒りの投場に窮した。

「どうして來たんです？」

「偶然途中で逢つたんさ。」

「さうぢやないでせう、打合せてあつたんでせう。」

「打合せてあつたつていゝぢやないか。旦那に身受けでもせられて、一緒に上京したんだよ。」

「まアあの藝術家ですか。」

根が畫家の妻君だけあつて、藝術家ときいて、急に張合がなくなつた。藝術家なら藝術家

に對する氣持ちで良人は遊んでゐるんだらうと存外寛大に觀念した。石井はそれでホツと息がつけた。

然しその藝者と、石井とは永くは續かなかつた。と云ふのは一日その女は昔のなじみの客に逢ひに行つた。そして男のネクタイピンに眼を付けて、それを強請つて持つて歸つて來た。それを石井に與へた。石井は大に喜んで感謝した。

所がその翌日、その男(某博士)が彼女を訪ねて宿へ來た。恰度その時石井と彼女は陸まじく語り合つてゐた最中だつた。その時石井は彼女に「お前は昨日頂戴したダイヤのピンは此の通り私が大切にしているから見せ付ける爲めに、襟にさしておけ。」と無理に貰つたダイヤを彼女の襟につけさせた。女はさうして別室で男に逢つた。話が永かつたので石井は一旦外へ出て、暫らくして又宿へ戻つてきた。見ると、女が身體にピンをつけてゐなかつたので、

「ピンは？」ときいた。すると、あれは便所へ落しましたと、女は割合に平氣で答へた。

「便所へ？ どうして？」

「さつきの方が、そのダイヤは倫敦で買つた迎てもいゝ品で遣るのは實に惜しいけどと話してゐらしたので、おかへりになつた後で、そんなにいゝダイヤなのか知らと便所の中で、フイとつまみとつて見つめてゐると、何うした拍子だつたか、ツと落して了つたんです。」

「本當かい？」

石井は女が急に自分にくれるのが惜しくなつたので、さう云ふ作りごとを並べたに違ひないと思ふた。いくら何でもあれを所もあらうに便所へ落すなどゝは信ぜられなかつた。石井は早速階下の男を呼んで探す様に命じた。そして賞金を出すと云つた。所が生憎その便所は二階から階下までブツ通しの間の長い便所だつた。探すだけ野暮であつたけど、さうしなくちや石井はどうしても氣が濟まなかつた。可成掃除口を探したらしいけど、遂に無駄に終つた。石井は折角の特別上等のダイヤを不注意にも、さう云ふことをして無くした彼女の不いだらにクワーツとした。そして面罵やる瀬な

かつた。女も勢ひ言葉を返した。そして大喧嘩になつた。「再び逢ふものか。」「貴方みたいな男位」そんな事で別れて了つた。

別れて以來、どうも彼女の遣り口の色々から想像すると、どうしても其のダイヤを急に再び欲しくなつて、落したと云ふ口實の下に、彼女が隠して持つて歸つたものと推せられた。そんなことを思ふと、急に男は女に對して不快さがあつた。爾來一二度女から便りらしいものがあつたけど、石井は何とも答へてやらなかつた。それツ限り忘れるともなく忘れてゐた、石井は。

○

その女からの突然の手紙なのだ。石井には最早昔の熱はなかつたけど、斯うして久振りの音づれを手にすると、何となく逢つて見たい氣がした。そこで直ぐ近所から電話をかけて見た。幸ひ彼女は宿にゐた。

「大方、屹度今頃電話をかけて下さるだらうと思ふて待つてゐたの。」と、男と云ふものは女に脆いことを百も二百も承知だと云はんばかりの口調だけど、石井は女の心が

矢張り自分に動いてゐるものと解して、内心ほくそ笑んだ。

「逢はうか、今から。」

「え、どこで？」

石井は其の日リリアンギツシユの「真紅の文字」を見に出掛けたいと思ひ込んでゐた時だったので、躊躇なく、

「新宿の武藏野館を知つてゐる？」ときいた。

「え、知つてるわ。」

「あすこの特等で逢はう、今から直ぐ。」

「始まつてるの？」

「ウン、十時からだもの。」

「え、解りました。ちや左様ませう。」

電話は切れた。石井は身仕度をして直ぐ出かけて行つた。武藏野館へ入ると女はもう來てゐた。彼女より外に誰も其の特等席にゐなかつたから直ぐ解つた。洋装で素晴

らしく氣取つてゐた。石井は彼女を知つて此の日ほど美しいと思ふた時はなかつた。

「早かつたね。」

「え、一寸前に。」

「相變らず美人だね。」

「そう見えますか。おかけさまで。」

「その後どうしてゐるんだい？」

彼女はチラと石井を見た。

「まだ奥様なんだらう？」

いつか、幾十萬圓の財産家の若主人に見込まれて、結婚したと知らせてよこした。

それ以後何も云つて來なかつたから、今もそう云ふ境遇にあるものと石井は信じてゐた。そして大方久振りで東京見物にでも來たものと解してゐた。

「離縁れちやつたの！」

「どうして？」

「イヤになつたんですもの。」

「相變らず飽きッほいなア。どうも一遍藝者をつとめたものは、よくくでないと、大概一旦人妻になつても直ぐ別れて了ふものだね。」

「さうかも知れせんわ、面白くないんですもの。」

「随分澤山貰つて出たらうナ、君のことなら。」

「いえ、此方からオン出て了つたんですもの、家まで綺麗に返してよ。」と、悔もななく笑つて彼女は云つた。

「ぢや今何をしてゐるんだい？」

「今ですか、前の政府の或る大官のお世話になつてゐるの。」

「大官つて誰だらう？」

「當てゝごらん。」

「別に無理に聴かなくてもいい。」と、石井は一寸鷹揚に見せて、

「又、僕に逢ひたくなつたのかい？」

「え、久振りですもの。私のこと思ひ出して下さつたことがあつて？」

「そりやあるさ、時々。君は忘れてゐるたろ？」

「まさか。あの時喧嘩してお別れしましたわね。随分悔しかつたわ、あの時。」

「でも時の力は總てを又以前の様にするものらしいね。」

「さうよ。何んだかお目にかゝりたくなつたんですもの。」

「あの手紙に今度はお友達としてお逢ひませうと書いてあつたね。ほんとに友達と
してかい？」

「……………」女は唯笑つて見せた。

「其の裡活動が始まつたし、観客も追ひ追ひと増えて來た。二人は充分に會話を交は
すわけにはゆかなかつた。石井も女も年頃が年頃だから、手を一ツ握る様なことをし
なかつた。漸く眩と眩とが時々接觸する位な程度で、お互の氣持ちを意識し、満足し
てゐた。活動が濟むと、石井と女とは郊外にきた。そして大に飲んだ。石井は女が斗
酒なほ辭せない強酒に少からず驚かされた。「もういゝだらう」と止めると、酒を飲め

ば飲む程私は愉快になるのだからと云ふ女の答へは何となく石井には興が深かつた。

夜の十時までに歸らなくちやと云ふので、それまで二人は充分に遊んだ。歸る時石
井は女が漸次悪すれの享樂氣分を好んでゐることを思ふて、一寸イヤな氣がした。こ
の前と違つて何んとなく石井を支配しやうとする様な態度が石井の心に影らしいもの
を興へた。

歸り道、女は石井に云つた。

「實は旦那の××が五日に東京へ歸つて來るんです。それまで小遣ひに少し不自由し
てゐますから、お氣の毒ですが、二百圓ばかり何うにかならない？」と、女は切り出
した。

「豊さうたつて駄目だよ。」

「いゝえ、ほんとなの、困つてるんだから。」と、本當に困つてる様な表情をした。

「その代り吃度お返ししますから。私を信ぜられない？」
信ぜられないかと聽かれて、られないと答へる者は先づあるまい。況んや石井の性

分として、さう出られると、逆さに振つても、られないとは答へることは出来なかつた。後になつて考へると、これ等の言葉は皆女の術の言葉だつた。今までの経験上、そう云つた方が却つて男が出し易いものだと言ふことを呑み込んでの言葉だつた。「屹度返してくれるなら、友達から借りて遣らう。」有名な畫家でも内實は貯金がなかつた。石井は友人から借りる目算を立て、一通り彼かこれかと名前を呼び起して、物色した。

翌日、石井は可成考へた。ほんとうに返してくれるものならいゝが、呉れないとすると困つたものだと思ふた。一層この儘女に逢はず仕舞ひにしやうかとも考へた。然しそれが何となく卑怯な態度の様に思はれたし、又何となく今一度女に逢ひたい氣もあつた。折角あゝ云ふのだからまさか嘘でもあるまいと考へて見たり、あれが常套手段の様にも察せられた。散々考へ抜いた擧句、困つてゐるのを助けて欲しいと云ふ言葉は尤もだと善意に解釋して、到頭附近の友達を訪ねて事情を話し、石井は無事に借

用して、其の足で會見の場所になつてゐた銀座のカフェーへ来て、女を待つてゐた。女は昨日と同じい扮装で遣つて來た。外へ出ると、男は直ぐ金を出して、女に手渡しした。その時石井は斯う云つた。

「その金の中には、僕の小遣ひも有りツ丈けさらけ出してある。だから殆んど今金がない。そこで濟まないが、以後費ふ金は其の中から出してくれ。」

女は變な顔をしたけど、ようございませと石井に答へた。これも後に解つて來たことだが、女は金に對して非常な執着を持つてゐた。そう云ふ暮し方をして來た女であつたら、偶にはサラリと出して見せる場面は一度位はある筈だが、この前の時も、又今度の時も、ツイぞ其麼風は一度もなかつた。

二人は此の日邦樂座へ行かうかと昨日一寸物語つてゐたので、邦樂座へと遣つて來た。

「切符を買ひたまへ。」

男は平氣で云つた。

「矢つ張り私が拂はされるの。この内から。」と、女は惜し相な顔をした。

「そうだよ」と、石井は其れまでにして汝の爲めに盡したんだと云はんばかりに立つてゐた。女は買った。中へ入つた、坐つた。活動が始まつてゐる最中だつた。

暫らく見てゐると、恰度面白いナと思はれる所で、女は密つと石井に、

「あたし、一寸便所へ行つて来るから。」と云つて立上つた、後にして思ふと、それが彼女の手段であつた。女は石井が活動を非常に好きなことを、昨日以來呑み込めてゐた。それが今一番面白い絶頂だから男が側見も振らず畫面に捉はれてゐる心裡を悟つて安心して立上つたものだつた。又、石井にしても冷静に考へたならば、女が此の最高頂の映畫の眞最中に、何も急に便所へ立つて行く必要が女にないと察して、不審に思ふ可きであつた。まこと便所へ行くんであつたら、こらへて堪へられぬものでもあるまい、一フィルムが済んでから充分に用が足せるものであつた。

女はさう云つて出て、こつそり宿へ電話をかけたものらしかつた。

女は戻つて来た。それから廿分程経つて、少女のボーイが靜かに近づいて来て、

「失禮ですが貴女様佐原さんでゐらつしやいますか。」と、女に訊いた。

「ハアさうです。」

「電話でございます。」

「さう。」

女は立つて行つた。男は始めて、をかしいナと思ふた。よしんば彼女が今日邦樂座へ行くと云つて宿を出かけたものにして、廣い場内の何處に坐つてゐるものか解つたものではなかつた。此の日は一等席とも二等席とも云つてなかつたんだし、それにハツキリ邦樂座へとは確定して、昨日云つてあつたものではなかつた。そして、もし電話でも劇場へあつた場合には切符の番號が豫じめ知られてゐる以外は、大抵一フィルムが済んで明るくなつた時に、舞臺の正面へ「何々さんに電話が何處から」と書き出されるのが普通であつた。

それを、ボーイがツカ／＼と来て、直ぐ佐原さんですかと訊ねたのが、石井には一寸妙に思はれた。然しまだ疑ふ程には至らなかつた。

女は戻つて来た。

「大阪にゐる旦那から、急用があるから直ぐ電話をかけろと云つて来たんですつて。こゝちや大阪へ掛けられませんか、私し一旦宿へ歸りますわ。そして宿から掛けて見ますわ。その代り今晚は屹度逢ひますから、五時半から六時迄に必ず電話をかけますから、先刻のカフェーにゐて下さらない？」と、女は熱心に云つた。

石井は何だか變だナと思ふたが、女の乞ふ儘に頷いた。女は立上る時、財布の中を念入りに改めて見た。今しがたボーイに呼ばれた時、わざと石井に手下けを托して行つたんだ。これも後に石井は知つたんだが、女は自分の舉動に男が不審を抱いて、急に貸した金を返してくれぬ様な不安を感じて、もしや手下けの中から抜きとつて了ひはしなかつたかを調べて見たのだつた。

女は全部が無事だつたので、安心して出て行つた。

活動が終ると、石井はカフェーにきた。約束の時間の間チーツとして女からの電話を待つてゐるだけと遂に來なかつた。男は始めて色んなことが氣附かれた。便所のこと

電話のこと。それよりも「以後二人の遊ぶ費用は其の金で」と云つたので、女が急に折角握つた金が惜しくなつて、こんな細工を弄したのではあるまいか。一旦金が自分の手に入つたが最後もう後は野となれ山となれで、スタコラ遁け出したのではあるまいか。

そう云ふことから昨日からの彼女の舉動言語を噛みしめて來ると、色々不審が募るばかりであつた。

到頭石井から女へ電話をかけた。すると先刻今晚八時につくと云ふお客を迎へに東京驛へ出かけましたと云ふ男の聲だつた。その男と云ふのは彼女に云はすと十七八の青年で、彼女の云はど監視役として旦那が附けてゐるんだと云ふことだつた。

「いよくこりや怪しい。」と、石井は齒を喰ひしばつて立上らうとする所へ、女から電話がかゝつて來た。

「どうも遅くなつて済みません。大阪から電話があつて、今晚友人の木村が八時に東京驛へつくから出迎へろと云はれたので。」

「それぢや一寸こちらへ寄つて行つたら何うだ？」

「外に出迎への方も一緒ですから。ですから折角ですが。その代り明日乾度お目にかかりますから、午後一時に間違ひなく、そこで。」

「嘘ぢやないね。」

「え、本當よ。」

石井は少しは安心したものの、一旦先刻から生じた色々な疑ひは何となく消すわけにはゆかなかつた。然し女が斯うした電話をかけて来た位だから明日は逢つてくれるものだらうと、何處までもお人よしをきめ込んで其の日は歸つた。

翌日、又もや其のカフェーに石井は來てゐた。所へ、速達だ。

「今日、一時のお約束は済みませんがお許し下さいな。一時頃其の人(木村と云ふの)が来る筈になつてますの。そして此處を引上げて了ひます。でないと今夜神戸へ歸らなければならぬんです。その人の家に厄介になつてゐる。でなければ一時歸つてこ

いとこの事なので。仕方がありませんから、木村さんのお宅へ行きます。そして明日午前中横濱の従兄の所へ行くと云つて出ますから。(それは本當に行くんですの)用事足して午後の六時迄に必ず新橋迄歸つて來ますから、済みませんが六時に新橋驛の待合室にゐらつして下さいな。十一時頃まで御一緒にゐませう。例のものは何卒御心配なく、五日の日にはたとへ晩までには必ずお手に入る様に致しますから。それだけはどうぞ、御安心下さいませ。お約束を破る様で済みませんが、今日はそんな風です。どうぞ悪くお思ひにならないでね。」

一度ならず二度ならず、女は何かと口實をつけては石井に逢ふまいと畫策してゐる様に石井には思はれた。金さへ取つて了へばもう用がないと云ふ遣り方がアリアリと讀めたのであつた。石井は自分の物なら諦めもつかうが、友人の金であつた。及び其の友人には自分からとして、どうしても返してやる金の當がなかつた。イヤでも應でも其の金は取返さなくちや済まされなかつた。

石井には何となく、女が斯うして東京にゐる間は何んだカんだと逢ふことを延期

しておいて、いざ歸る日になつたら、ブイと其の儘歸つて了ふ様に思はれて仕方がなかつた。そうなればもう何もかも了了ひだつた。石井は折角帝展の作品の忙しい時にこんな事の爲めに時間を浪費するのが、全く人に云はれぬ苦惱の甚だしいものがあつた。

○

翌日、石井は銀座を歩いてゐる時、偶然親友のHに逢つた。二人は酒が好きだつたので、直ぐ飲みに入つた。酒は石井を酔はした。酔ひに乗じて、今晚女と逢ふことをHに話をした。Hは好奇心ムラ／＼として、ぜひ何處女か一寸だけ見せろと云つた。それちや見せて遣るから、若し女の姿が見えて二人が話合つたら、直ぐ其の場を外して君は何處へでも行つて了へと云つた。Hはこりや手厳しいと頭を抱へたけど、承諾した。

六時近くまで大に痛飲して、二人は新橋へ來た。十五分前であつた。それから待てども待てども女は來なかつた。石井は又しても遣られたナと思ふた。Hは「こんな待つても來ない時は來ないんだ。來る積りなら斯うまで待たしやしないよ」と云つた。石井はイラ／＼とした。そして一切の顛末をHに打ちあけた。Hは聞き終ると、アハ、と嘲笑つて、

「君はその金が入ると思ふてるのかい、甘い男だなア。」と、背中をボンと叩いた。

「返すもんか。大體金と云ふものは返すものだと思ふて貸すのが間違ひだよ。」

それでも石井はあの金だけは何うしてもと眼の色は物凄かつた。幾度か立つて開札口まで來て見たけど、遂に彼女の姿は見えなかつた。到頭七時十分になつた。

「どうだ、今から女の宿へ行つて調べて見ようか。木村と云ふ家が解らなかつたら乗せて行つた自動車を調べたら、どうにか見當がつくだらうと思ふ。」

「そう云ふことに僕は興味を持つてゐる。面白いナ。よし行つて見よう。」

二人は直ぐ驛前の圓タクを呼んで、それに乗つた。目ざす宿は神田の×××ホテルだつた。ツカ／＼と帳場に來た。男ボーイの二人が變な顔して見た。

「こゝに佐原須賀子と云ふ女の人が泊つてゐましたね。」と、訊いた。

「佐原？」と、小首をかしけて、

「そんな方はありません。」

「いゝや泊つてゐた筈です。そして昨日か此の宿を出た筈です。」

「お一人ですか？」

「いゝや、若い男と二人で。」

「佐原？ いゝや決して其處人は泊りません。大體男女の客は一組もありません。」

「だつて、それぢや怪しいぢやありませんか。現に私が此處へ電話をかけて、佐原さん

を呼んで下さいと云ふと、必ず本人が出ましたよ。こゝの電話番号は神田の〇〇〇〇でせう。」

「電話番号は合つてゐますが、そんな人はありません。」

「確かにゐるッ。」

「ゐません。」と、押問答をしてゐる最中に、ボーイの一人がズツと奥の廊下を行つた

が、やがて戻つて来て、

「解りました。」と云ふ。

「佐原ではありません、嘉宮と云ふんです。」

「嘉宮——フーム。ぢや名前を代へてるナ。」

「ゐない、ゐないと頑張つてゐたボーイは一寸面目を失して、帳場を調べて見た。すると神戸市何々と書いてあつたが、何々妻と全ツきり天つ晴れ夫人を名乗つてゐた。」

「この男はいくつ頃の人ですか。」

「二十七八歳位です。」

「二十七八歳？ ホウ十八位な書生だと聽いてゐたが。所で本人は昨日こゝを立つた

んですね。どちらへ行きました。」

「いゝえ、まだゐらつしやいますよ。」

「ゐる？ 本人が？」

「果然嘘の一ツがハッキリこゝでバレた。」

「然し今日横濱へ行くと云つてお出かけになりました。今朝。」

「ホウ。失禮ですが、荷物がまだありますか。」

「え、小さい包みが一個。」

「それだけですか。」

「え。」

石井はヒョツとすると、遁けたんぢやないかと思ふた。

「宿賃はもう拂ひましたか。」

「い、え、まだです。」

「可成ありませうね。」

「え、随分。」

「何でせうか本人はおかみさんから金を立替へて貰つたなど云つてゐましたが、本當でせうか。」

「おかみさんはありますが、お客様に立替へるなんて一切ありません。」

これも嘘だつた。本人は私は目下困つてゐるので、三越などの買物の仕拂ひを皆おかみさんに立替へて貰つてゐる。それを催促されて仕様がなからと云ふのが、金を借りる時の口實であつた。

「困つたなア。」

石井は思はずつぶやいた。

「どうかなすたんですか。」

「ウン、少し。」

「お差支へなければ話して下さいませんか。」

「話す程のことでもありませんが。」と、避けて、

「兎に角あの應接室で本人の歸るまで待つてませう。」と、石井は云つた。事實待つつもりで其處へ入つたのでなかつた。途方にくれたのと、一つは疲れが一時に出て來たが爲めであつた。二人はグナリと其處へ來て、安樂椅子にうなる様に坐り込んで了つた。お互はもう口も利けない程になつてゐた。默念として暫らく左様してゐた。然し

いつまでも際限がなかつたので、もう歸らうと云ひ出して、石井が何かを帳場へ云ひ残しに来て、何氣なくフイと後を見た時に、その應接室の前に、天から降つたか、女の下着のまゝの姿が入口にツと立つてゐた。

「??。」

石井は急に戻つて行つた。女は最初そこをのぞいた所、Hのみしかゐなかつたので引返さうとして石井の姿を認めたものらしく見えた。

「あたし今横濱から歸つて來たの。」

女から先きに左様云ふた。Hが後の解釋に依ると、それは口實で、チャンと部屋にゐたものに違ひないと云ふことだつた。なほ又嘉宮が佐原とかけて電話が通じたのは電話掛りを密かに買収してあつたのだ。帳場の知らぬのも無理もないと云ふことだつた。

「君は、昨日手紙で木村と云ふ家へ引上げたと書いて寄越してゐながら、チャンと斯うして泊つてゐるぢやないか。」

「そうするんですが、或る事情で。」と、女は巧みに逃げて、

「あたし遅くなつて済みませんでしたけど、七時半頃に下りたんですよ、新橋へ。そうしたらもうお見えになりませんので、その儘こゝへ歸つて來たんです。戻つて來て直ぐ貴方の所へ電報を打たうと思ふて、ボーイを呼んで、電報用紙を取寄せようとした時、ボーイが斯うくした方がゐらつしやいましたと云ふ。そしてヤレ荷物はどうの、ヤレ仕拂ひが何うのと仰しやつた相です。カーツとして、いつ頃その人が歸りましたツと聽くと、まだゐらつしやいますと云ふので、夢我夢中で下りて來ました。よくもよくも此の宿で散々ツばら私に恥を搔かせましたね。あれツばかしの端金か何んです。チャンと五日までと約束した以上は明日一杯まではあの金は私の自由なものですよ。費はうと費ふまいと此方の勝手だよ。逃げも隠れもしませんからね。飛んでもない眞似をして貰ひますまいよ。何です全で刑事みたいに、根掘り葉掘りして。もうとツとと歸つておくれ。」

女は自分が折角嘘を成就させて、一杯喰はせて來たのが、最後に當つて物の見事に

観破されたのに、すつかりムカツ腹立て、今まで石井が聞いたこともない毒舌を弄して喰つてかゝつた。石井は黙々として微笑してゐた。

「貴方は誰方です。」

先刻から一言も口を利かなかつたHを女は何となく氣味が悪かつた。ヒヨツとしたら刑事ぢやないかとも思ふたらしい。

「私ですか、Hと云ふものです。」

「失禮ですが御名刺を。」

「私は名刺を出しますが、その代り貴女の名刺も頂戴しますよ。」

「オホ、私し名刺なんか持つてませんわ。」

女はそう答へたものゝ、このHが薄氣味悪く思へて仕方がなかつた。

Hは一寸考へる振りをしたが、聽てニヤリと笑つて小さいノートを擴げて其の中に挟まつてゐる名刺を一枚取り出した。

「さ、あけませう。」

女は受取つた。Hの姓は全く世に再びない珍らしいものだつた。珍らしい丈けに、女は此の男いゝ加減な名刺を渡したナと思ふたらしかつた。それが又女をして愈々Hの正體を知る上に苦しませた。

「どう讀むんですか。オヤ横に假名をしてありますね。××××さうですか。」

「それで支那人の姓ぢやありませんよ、私の姓です。」

Hの云ふことは一ツ一ツ彼女の心臓を何か知らなく様に思はれた。屹度刑事の一時の間に合はせの名刺かも知れない、裏を裏をと行く女は、そう考へた様な風であつた。

「もう話が濟んだら、部室へお歸りになつていゝでせう。」

Hは左様女に徐ろに云つた。

「え、ちや歸ります。」と、答へるが早い、強ひて虚勢を示すかの様に、スツと肩をそびやかして、トン／＼と、態と一生懸命に力を入れながら階段を上がつて行つた。それは私共にきかす爲めでもあつたが、一ツは帳場のボーイ連に對して、私は物の見事にあの二人の男共をヤリ込めて遣つたと云ふ頭腦のない仕業であつた。斯

うしたことは益々彼女の品性を疑はしめたに違ひなかつた。

外へ出ると、Hは石井に云つた。

「實に美人だね。だけどあゝ啖呵を切つちやもう何もかもお仕舞ひだよ。あいつチャンと部屋にゐたのさ。いつ迄も應接室から僕等が歸らなかつたので、一晩中でもあゝして居られちやと、到頭シビレを切らして観念して下りて來たんだよ。それから君一人だつたら、甘く見縊つて、その金なんか返したのか。たゞ僕がゐるので何者か知れぬから、ヒョツとすると其れが恐さに、もしかすれば持つて來るかも知れない。然しまア諦めてゐた方がいゝかも知れないぜ。」

「全くHの云ふ通り、石井一人だつたら、女は齒牙にもかけなかつたかも知れなかつたらうが、Hは遂に疑問の人であつた。」

その疑問は餘程女の神經を悩ましたものと見え、翌日の午後五時頃、或る指定の箇所へ、女は青年と稱する男帯同で、到頭持參して來た。石井は折悪しく其の時そこゐるなかつたから、應對した男に模様を訊いた。

「金を出してから、何か云ひたけな様子でムズムズしてゐた様子がアリ〜と見えたが、此方は何も知らぬ氣に應對したので、到頭歸つて行つたよ。」

斯くして無事、石井は入手することが出來た。

「これも僕がゐるた爲めだぞ。」と、Hの威丈高を御尤もと許り、二人は「よかつた、よかつた。」と、互に肩を叩き合ひながら「奪られたと思へば。」と、痛飲更に痛飲して、戰勝を祝し合つた。

石井は茲に再び始めて専心畫筆に親しむ氣持ちになることが出來た。恐らく本書いづる頃彼の名畫は斯う云ふ彼の苦惱を知らぬ氣に、帝展の一室に飾られて、萬都の人氣を雙身に擔ふであらう。

思はず合掌

- ◇金澤へ行つて、久振りで友人石黒君、英君に逢つて愉快であつた。一日鶴來と云ふ同市を去る三里深くの山へ鮎を喰べに行つた。
- ◇その途中の大平原を十幾年振りで見たであらう。何と云ふ眼界の廣さだ、素晴らしさだ。住んで見たいと思ふた。
- ◇鶴來の鮎はうまかつた。山の深い所に泳いでゐる香魚には都で味はひ知れぬ味あがる。
- ◇一旦料亭を出て、急に時計の見えないことに氣が附いた。二人が屹度隠してゐるんだらうと平氣でゐたが、本當に知らぬと云ふ。
- ◇驚いて再び二階へ上がつて、女中やおかみさんと大騒ぎして探したが、ない。
- ◇最初は戯談にあんな事を云つてゐるんだらうと高を括つてゐた兩君、つまらぬことに時間を取られてはと、始めて本氣に探してくれた。
- ◇結局、僕のポケットから發見して、「コレは何だ?」と、きめつけられ思はず合掌してへタバツた。

ユーモア小品

子供の警句

我が子は誰しも可愛いものだけど、日出子ちゃん(六歳)は特別に可愛い。妻に似ないで私に似て生れた甲斐こそあつて、眉目實に秀麗である。終日縁談雨と降る素質が早くから仄めいてゐる。音に容色に於て群を壓するばかりでなく、その云ふことも亦人の意表に出るから可憐の情一入である。先日も妻の所へ駆け付けて行つて、何と云ふかと思ふと、

「ねえ、母ちゃん、お庭にゐる大工さん可哀想だよ。」

「どうして?」

「だつて母ちゃんがおやつを上げないものだから、釘を喰へてゐたよ。」

これには母ちゃんもスツカリ一本参つて了つた。大工と云ふものは絶えず釘を口に啣んでゐて、それでカンカンやるのだ。それをヂツと見てゐたらしい。さてこそ御注進と母の許へ駈け付けて來たのだ。

この日出子ちゃんの姉様に静子(十一歳)と云ふのがある。年齢の割に甚だしくおませさんである。生れ落つるから本ばかりに獅噛み付いてゐる。今日も妻に向つて斯麼事を訊いた。

「ねえ母ちゃん、母ちゃんは父ちゃんに戀してゐるのね。」
妻は眼を丸くして仰天した。

「何故？」

「だつて母ちゃんは父ちゃんに叱られたつて黙つて口答へしないでせう。だから戀をしてゐるんだよ。」

僕は横にゐて「子供の觀察は神の如く正しい」と大に乗り出した。すると妻は笑ふに笑はれず、大に母たる態度の下に「これから本など讀んちゃ不可ません。詰らぬ本

を讀むと女學校へ入れませんよッ。」と威し付けた。之からは大に口答へを提供して、この冤罪を遁れようと思ふらしい。そして「近頃の子供は油斷も隙もない。」と、ベソを搔いて了つた。

病氣とお化け

近頃、静子が病氣なので、色んな方面からお菓子だの、果物だの、ご本だのと、様様のお見舞物を、來る人毎に持つてくる。

「ねえ母ちゃん、どうして皆魔が之をお姉ちゃんへと云つて、日出子ちゃんには少つとも持つて來ないの？」

「お姉ちゃんは病氣だからよ。」

「病氣だと、何でも呉れるの？」

「何よ。」

日出子は其儘二階へ上がったかと思ふと、暫く經つて「母ちゃんッ、一寸來て——」

と大聲あけて呼ぶので、妻は何事かと飛んで行つて見ると、いつの間にやら夜具敷伸べて、その中へもぐり込みながら、

「母ちゃん、日出子ちゃん病氣だよ——ッ。」

「その可愛い日出子も、いつの間にか姉ちゃんの百日咳が傳染つて本當の病人になつて了つた。それでも自分の咳の止んでゐる時、姉ちゃんが咳で苦しんでゐるのを見ると、ピヨンと刎ね起きて、背中へ廻つて一生懸命に「お姉ちゃん苦しい？ お水持つて来る？」など、心配相に訊いてゐる。そのいちらしさには親父の小生思はずホロリとさせられる。

その我等の日出子ちゃん、今日は母ちゃんにお化けだと云はれて、ブーンと脹れてゐる。どうしてお化けにされたかと云ふと、隣に吉田さんと云ふ人が住んでゐる。その長女が三歳で、今を盛りの可愛さだ。妻はツクツクと其の一舉一動を見入つて、
「モウ子供なんか欲しくないと云つてましたけど、隣の久子ちゃんを見たら急に又あんな小さい子を欲しくなつて来ました。あの子と較べると日出子ちゃんつたら、まる

でお化け見たいだわ。」と、洩らした。

日出子ちゃん此の言葉に大にふくむ所があつたらしい。夜になつて妻が「さア日出子ちゃん、一緒におねんねしますよ。」と、呼んだ時、どう云ふかと思ふたら、
「母ちゃん、お化けとねんねすると怖いよ——。」

苦しい時の散歩

「ねえワイフ、君は良人を一番喜ばすことは何であるか、知つてゐるかい？」

「そんな事位知つてますわ。」

「何だい？」

「愛することだわ。」

「わアー助けてくれ、今更愛なんか何うでもいよ。新婚當時みたいな事を云つてゐる。」

「ぢや子供を可愛がることだわ。」

「子供は二人の共有物だから當然のことだよ。良人を喜ばす方法の最上のものをと訊いてるのに。」

「さア——」

「解らない様ぢや困るなア——、云はうか。料理に巧になることだよ。君ほどいゝ頭脳を持つてるながら料理の拙手な者も世の中に少いねえ。」

「左様か知ら、明日あんな旨味しいビフテキを拵へて上げたのに。貴方だつて黙つてみんな召上つた癖に——」

「家庭に風波あらしめない様にと無理に嘸みおろしたんだ。良人の苦心の存する所だよ。」

「良人良人と貴方は直ぐ自分で良人よ。あたし良人ツて其麼豪いものだと思ふてませんか。貴方ツたら随分勝手よ。始終外へ出て何でも旨味しい物ばかり喰べてるらつしやれば、家の物が旨味しくないのは當然よ。皆料理人を置いて商賣においしい物を作つてるんですもの。少し旨味しい物を續け様に作つて上げれば、直ぐ（君

は家庭的に出来てゐないなア——）と斯うよ。全で私を小言の捨て所の様に思ふてゐらつしやるんですもの。昔は泣いて許りるましたけど、近頃は敗けてるませんよ。負けて居ればいゝ氣になつて漸次私を酷めなさんですもの。女だつて女としての云ひ分はいくらでもありますわ。そんなに旨味しい物を喰べたかつたら、私も一緒に毎日あちこちとお供さして下さいよ。近頃の世の中は見學流行りですからねえ。それに良人ばかりいゝ目に遭つて、妻は家にと云ふ法則が無いんですからねえ。」

「君は雄辯家になつたねえ。」

「正しいことの前に、誰だつて雄辯ですわ。」

「チトお手柔かに。」

「貴方こそだわ。貴方はまア黙つて一日だけ家にゐて御覽なさいナ、いかに妻と云ふ者の仕事が多いものかと云ふことがお解りになりますわ。」

「漸次僕の旗色の悪いことを云ふ。」

「左様ぢやないけど、貴方は今時の人に似合ぬ少し妻と云ふものに同情が無き過ぎる

のよ。私でなくちやならぬと云つてお貰ひになつた癖に、少しは理解下すつたつていわ。妻を愛すると云ふことは御機嫌とつて欲しいと云ふことぢやないんですよ。妻と云ふ者に、妻と云ふ義務を果さしめることが一番の愛よ。」

「だから完成させ様と、料理の拙いことを……」

「それは希望として仰しやることです。かりにも（無理に嘸みおろした）なんて侮辱的の言葉は止して下さい。解りましたか。」

「解りました。オイ散歩に出かけるよー」

金満家の奥様

妻は現在持つてゐる可成大きなダイヤの指輪を手に入れる時「之さへ買つて下されば、今後決してアレ欲しいコレ欲しいと云ひません。」と、堅く誓つて到頭僕を説き伏せたものだつた。それから半歳程、成程彼女は小羊の如く温順しかつた。「われ善良なる妻を見る哉」と内心恐悦してゐた矢先、今日「今日は僕の洋服を作るよ。」と、云ひ

出した時、「私だつて着物を一枚買ひたいんですから。」と、早くも對抗の戦陣を布いたから氣に入らなかつた。

「君は家庭の經濟と云ふことを知らないね。」

「ぢや貴方だつてお考へなすつたらいいわ。」

「僕に考へよと云ふのか、そりや君ヒドいよ。僕の洋服は四年前に作つたんだよ。而も去年は裏返しにまで仕立て、着たんだよ。そして迄我慢してゐたんだよ。その無言の苦心が君に解つてゐなかつたのか。」

「解つてますわ。だけど私だつて着物の裏返しは利く物は幾程でも左様しますわ。」

「ま、君の思ふ通りにしたらいい。それは左様と近頃毎日銀座を歩いてゐて色んな知合の夫婦連れに逢つてツクツク感じたことがある。」

「どんな事？」

「金満家の奥様に限つて銘仙か何かの淡泊した風をしてゐて、少つとも金のある様子をしてゐない。それでゐて何處となく餘裕綽々としてゐる。それに反して苦しい世帯

の連中の妻君に限つて、如何にも此麼着物を持つてますよと云はん許りにして歩いてゐる。女の煙草を燻む人が多くなつたことと共に、近頃の東京の新現象だと思ふ。」

「さう仰しやれば左様ね。」

「奥床しいもンだね、あれは。流行を追はない人には何處となく落着きと品があるよ。ところで君は今度は何麼着物を注文する積り？」

「まだ定めてないの。」

「去年のいでいゝぢやないか、今度は我慢したら。」

「ハイ、ぢや今年は金満家の奥様になりますわ！」

遅参の罪

今日は十年振で訪ねて来るお友達があると云ふので、ワイフは朝からソワソワしてゐる。何は兎もあれ珍客を迎へる準備として、先づ三越に人を馳せて、洋食の折詰を買はせた。次に水羊羹と果物を用意した。祕藏の茶碗を出すやら、お茶を吟味するや

ら大騒ぎ。

約束の三時の時間が近づくとチャンと身仕度萬端、縦に見つ横に見つ天ツ晴れ淑女の君として何處へ出しても恥かしからぬ扮装。

「いつも其麼風をしてゐると、胸に春風そよ吹くんだけど。」

「貴方だつて、いつもモーニング姿だと、私も妻たる幸福に浸るんだけど。」

「全く近頃見應へがするぞ。朝日新聞の明治大正名作展覽會に招待された様な氣がする。」

「有難う、こんな名畫ばかり見てゐらつたのはお察ししますけど、名畫と云ふものは、時々出して見てこそ價値があつてよ。いつも斯うした風ばかりしてゐたら、屹度又飽きるでせう……それは左様と、もう三時が打つたのに何うしたんでせう。田舎の人は本當に時間の觀念がありやしない。三時のお約束なら十五分前に來るのが昨今の東京の美風だのに。」

「左様だよ。大に同情する。」

「本當に来る時間に来て下さらないと、気が何となく焦々して不可ませんのねえ。子供に洋服でも着代へさしてゐませうか。」など、無理にあせる心を抑制の方法を執つたりした。

「どうしたんでせうね、まだ見えないのよ。」

妻は幾度か立つたり坐つたり少つとも落着かなかつた。四時を打つても四時半になつても遂に訪づれが無かつた。

「何と云ふ人だらう、屹度もう来ないんだよ。」

「左様らしいわねえ。折角チャンと用意させておきながら随分失禮よ。」

「プン／＼してゐる、尤もだ。」

「どうだ、皆廢で此の御馳走を喰べて了はうぢやないか。」

「え、どうせ来ないんなら久々で家族團樂の幕に致ませうよ。静子ちゃんおいで、日出子ちゃんおいで。これを皆で喰べるのよ。」

親娘一同擧つて口を動かした。

「折角苦心させておいて何と云ふ方でせう。」

「實に怪しからん。」など、話合つて綺麗に喰べ終つて、妻が普段着に着代へた途端に

「御免下さい。」と、玄關に女の聲がした。ワイフと僕とは思はず顔を見合せた。

女中が飛んで来た。

「あのウ、常川富美子さんと云ふ方がゐらつしやいました！」

今様一豊の妻

少し遠い所へ旅行をするので、おれは空氣枕は何處へ藏つてあるだらうと、彼方此方探した。無い。最後に簞笥の抽出を見た所、小さい箱があつた。豈天こんな中へは入つてもるまいと思ひつゝ開けてみると、不思議や暫く見なかつた鱈の皮の財布があつた。珍らしかつたので一寸手にして、何氣なく中を覗いた。すると意外や其處に百圓紙幣が幾枚もあつた。これはこれと許り花の吉野山とおれは仰天して了つた。

妻め銀行にも入れず、密つそり貯金してゐたらしい。いつか洋行したい／＼と云つ

てゐて、其の金は自分で拵へると己れに聽かせてゐたが、いつの間にか之れ丈けを殘してゐたものらしい、己れには噓にも出さなかつた。家政に一切無關係な己れは唯毎月貯金帳のみを見せられて、「ウン、さうか。」と、頷いてゐる許りに過ぎなかつた。

おれは素知らね顔して、その儘又藏ひ込んでおいて、夕飯の時、

「昨夜、妙な夢を見たよ。」と、告げた。

「どんな夢？」

「神様が枕元に現れて、汝は山内一豊の様な立派な心掛けの妻を持つてゐると。山内一豊ッて知つてゐるだらう。貧困で何うしても自分の好きな馬を買へず、其の爲めに武士の面目に關すると歎いてゐると、妻は見るに見兼ねて、それではと云つて鏡臺の抽出から、多年秘してゐた五十兩かどれ丈けかを出して、之で馬を買ひなさいと勧めそれで一豊は大層出世したと云ふ話さ。」

「知つてますわ。」

「何と感に入つた天ッ晴れ夫人ではないか。」

「さうですね。所で夢は何うなつたの？」

「それからが肝腎だ。汝の妻は汝を洋行させ様と密に貯金をしてゐる。汝は洋行したら、一豊以上に出世すると仰しやるんだ。」

「變な夢ね。あたし一豊の妻みたいな其處心掛けのいゝ女性ぢやないことよ。」

「さうか知ら。だけど夢と云ふものは當るものだよ。己れもいゝ妻を持つて僥倖だ。」

「そんなに煽てたつて駄目よ。でも不思議ねえ。」

「何が？」

「何がつて、不思議だわねえ。」

「何がさ。」

「貴方見たの？」

「何を？」

「何をツて、何をツて。」と、顔色を窺ひながら、ちやあれを見たんぢやないと思ふたのか、急に方向轉換して、

「本當にそんな夢見たの？」と、夢の方へ獅噛み付いて了つた。此方も此方だ、そう出るならばと思ふて、

「まだ夢の続きがあるんだよ。」

「どんな？」

「その貯金は今日良人に出さなければ、茲三日の裡に火事か又は盗難で屹度無くなつて了ふ。そうした時、妻は良人に打ち明けられず、或は其れが爲め發狂するかも知れない。オイ發狂しちや不可んぞ。」

「まさか。でも本當に夢ッて當るものか知ら。」

「當るものだよ。靈感は夢からと云ふ比喩もあるよ。」

「イヤな夢をご覧なすつたわねえ。あたし何うしようか知ら。山内一豊の奥様嫌ひだわ。」

「何うして？」

「だつて飛んでもないことを後世に教へるんだもの。」

「あの良人を思ふ心の尊さ。妻は斯くありたきものだ。今時なら良人が洋行したいし、たいと云つてゐると、それ程迄に仰しやるならと、屹度眼の前へ出した夫人だね。」

「洋行、洋行つて私が洋行するのよ。」

「女の一人旅は危険だよ。」

「男だつて危険だわ。」

「ぢや夫婦して洋行しようか。」

「本當？」

「本當だとも。」

「ぢや貴方は貴方で貯金なさい。私は私で貯金するから。」

「夫婦が互にそんな風にすると不和の素だよ。夫婦と云ふものは異身同體とされてゐながら、そんな水臭いことをするものぢやないよ。」

妻は暫く考へ込んでゐた。

「あたし實はね。」

到頭切り出した。

「貴方を洋行させて上げ様と、實は密つそり貯金してゐたの。」妻は無理に一豊の夫人に餘儀なくされて了つた。

「だけど、只今私の信頼する良人のお言葉に依つて、それは夫婦一緒に洋行する費用に模様變へして了つたの。だから貴方ばかりの洋行費用としては絶対に不賛成よ。」

「一豊の妻は左様ぢやなかつたがなア——」

「時代が違ふでせう。あゝ折角私が苦心して貯めてゐたつて何にもなりやしない。私は貴方が萬が一にも離縁するとも仰しやつた時、ハイ左様ならとそれを持つてパイと出て了ふんでしたに。これぢや無理にも貴方に附着いてゐなくちやなりませんわねえ。ほんとに憎らしい夢。もう、夢なんか見るのはお止しなさいな。」

妻に秘密の金

おれは妻に秘密な小遣錢を、どこに藏つて置くかと云ふと、ズボンのお尻の所にあ

るポケットだ。あすこなら發見る氣遣ひがない。いつでも出し入れの出来る財布には常に妻の入れた儘が存在してゐるから、妻は誰れに對しても「家の主人は感心なんですよ。」と、賞め干切つてゐる。此の故を以て論ずるならば、公然の財布に異状のない者ほど秘密の金を持つてゐると云ふことになる。

所が今日大變なことに會した。

昨日、おれは房州へ遊びに行つた。汽車の中三時間半のお蔭で可惜白ズボンが石炭の煙で眞黒になつて了つた。歸つたのが夜の十一時、直ぐ其の儘寢て了つた。翌朝急に用事があつたので、朝御飯を済ます早々出かけなくちやならなかつた。おれの頭の中は其の時その用件で一杯になつてゐたので、何等他を顧みる暇がなかつた。慌てゝ白ズボンに片足を穿き込んだ時、フト眼についたのはズボンの其の汚れである。こりやいかんと思ふたので、いそいで新調した計りの今一つのズボンにバンドとズボン釣りを取代へた。そしてあゝ斯くてこそと、いゝ年齢をしながら、オホーンと收まりながら、その儘階下へおりて、

「オイ、二階にあるズボンを直ぐ洗濯屋に出しておいてくれ。」と、倉皇と云ひ残して外へ出た。聽て夕方になつて歸つて來ると、妻は何だか變な顔をしてゐる。怪しいなと思ふてゐると、さて晚餐が済んでから、「貴方」と、改まつて己れを呼んだ。

「ウン？」

「貴方は屹度私に隠してお金を持つてゐらつしやるでせう？」

「そ、そんな事があるものか。」

「本當ですか。」

「本當だとも。訊くだけでも失禮だよ。」

「左様ですか、ちや良うございますけど。實はツイ先刻洗濯屋が飛んで來て、奥様濟まぬことを致しましたと勘辨りますから、何うしたの？ と訊くと、あのズボンを大變お急ぎの様でしたから、直ぐ釜へ入れてグラ／＼煮立て、聽て出しました所、どうもお尻の邊に何かあるらしいので、紙か知らと出して見たらお紙幣がどつさりドロドロになつて了つてあるんです。と斯う云ふんですよ。ではお紙幣ちやなかつたんです

ね。」

おれはハツとして思はず飛び上がらうとした。

「ほ、本當かッ。」

「本當ですよ。でも紙幣でなかつたらいゝぢやありませんか。」

「いゝや、どうして、どうして、紙幣だ、紙幣だ。而も皆十圓紙幣ばかりだよ。」

「どうして其麼お金持ちだつたの？」

「それが、ソノ、ソノ。」と、おれは顔から火が出る様になつて、

「それよりも其のドロ／＼を貰つて來い。どうにかして使用へるかも知れぬ。」

「今更どう仕様もありませんと云ひ残して行きましたよ。それに彼麼大きなお金を奥様どうしてお氣附きにならなかつたんですかと、逆様に私の方が注意されましたよ。

斯うなると誰方でも奥様を笑ふんですからねえ。」

おれは形勢我れに利がなかつたから、黙つて了つた。そして何が故に昨日房州へ遊びに行つたのか知らと、原因に遡つて後悔を久しうした。

「貴方ッ。」

「ウ？」

「實はね、先刻洗濯屋のおかみさんが慌たゞしく遣つて来て、應對した女中に貴女ぢやいけません。奥様に直接會はして下さいと云つたんですよ。何事が起つたのかと吃驚して出ました所、奥様ズボンのかくしの中にお紙幣が此處に入つてましたよと渡して呉れたんです。私どうしても信ぜられないので、他人のと間違へたんぢやありませんかと訊きました所、いゝえ確にお宅様のですと云ふので仰天しましたわ。あの洗濯屋は開業した許りで、最初は信用が肝腎だと思へばこそ持つて来て呉れたんですが、外の店だつたら屹度知らぬ存せぬと云ひ張つて了ひますよ。」

「解つた。今度は大切に藏つて置くから渡してくれ。」

「いけませんッ。又此處事があると私の落度になりますから、しつかり預かつておきますわ！」

身分不相應の罪

妻は何と思ふたか、今日銀座へ買物に行つた序に、おれに絹の靴下の素敵なのを買つて来て呉れた。我が妻斯くて更に佳し。大きな聲で他人の前で云はれぬが、おれは生れて初めて絹の靴下をはいた。何と云ふ嬉しいものだらう。素晴らしき哉人生だ。いつも他所を訪問して第一に靴を脱ぐ時、ハツと思はすものは靴下である。今日は穴があいてるやしないだらうかとそれがギクリと胸にくる。のみならず幾度かの洗濯で色淺間しき迄に褪けてゐるのを見ては、誰か涙なくして可ならんや。いかに眉目秀麗なりとは云へ、氣色大いに上らぬ。兎もすれば眼を下にして快々として樂しまない。「抑々田中内閣は」など口で豪相なことを云つても、一度び視線靴下に及べば心膽轉た寒きを感じざるを得なかつた。所へ計らずも絹の靴下だ。おれは無暗にあちこち靴を脱いで上がる家を訪問した。そして、

「どうも私は坐ることに慣れないので。」と云ふ口實の下に、「御免します。」と、態と足

をヌツと伸べた。鹿の子の醒めん計りの靴下だ。その靴下で「ウムその問題はだね。」と云ふと、口角から飛ばす泡に値打ちが出て来る。

最後に友人と四谷の三河屋へ牛肉を喰べに入つた。外の連中がガスの靴下で小さくなつてゐるのに引代へ、おれの足には燦然たる光りがあつた。聽て食事を終へて立上つた。おれは恰も天下を取つた様な揚々たる気持ちで、真先になつて座敷を潤歩して廊下に来た。そしてフンゾリ返つて階段を下りた。絹のお蔭でツル／＼たる様な快感だ。おれは階下の下足番に「此の足を見よ、絹を見よ。」と、云はん許りにした。

突然、呀ツと云ふ間もなくスツテンコロリンした。おれはイヤと云ふ程階段で頭をコツン、コツン音させながら轉け落ちた。

その晩、おれは徐に瘤だらけの頭を擦つて妻に云つた。

「お互に身分相應の買物に心掛けませう！」

昭和二年拾月 日印刷
昭和二年拾月 日發行

定價金壹圓八拾錢

著者印

著者 奥野他見男

發行者 東京市神田區美土代町二ノ一 中村徳二郎

東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三

印刷者 谷口熊之助

發兌所

東京市神田區美土代町二ノ一

白

揚

社

振替東京二五四〇〇番
電話神田(25)二二八五番

溝口印刷所印行

56
24

奥野他見男著

四六判箱入
總布美裝

青春よとらば

定價壹圓八拾錢
送料金拾四錢

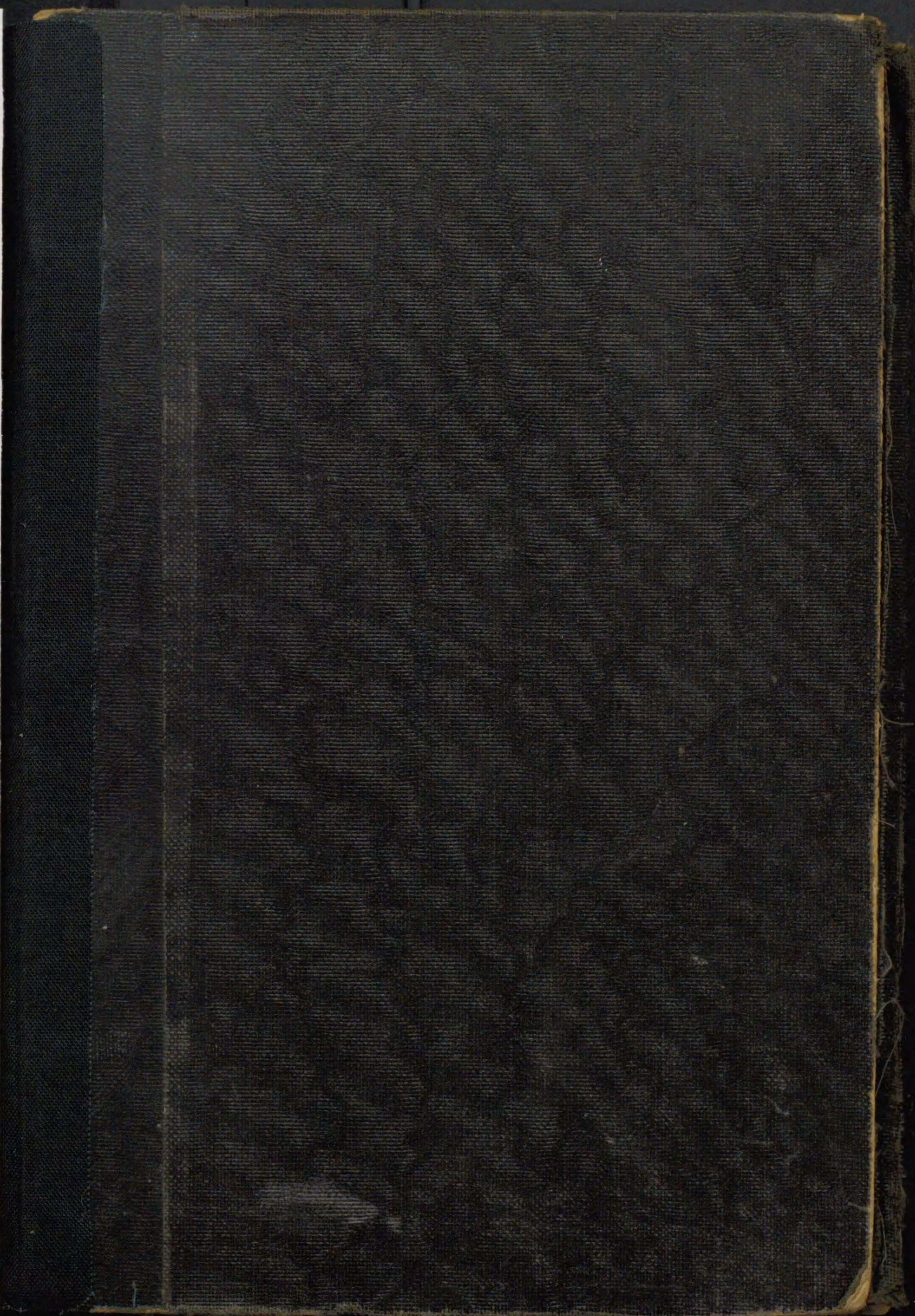
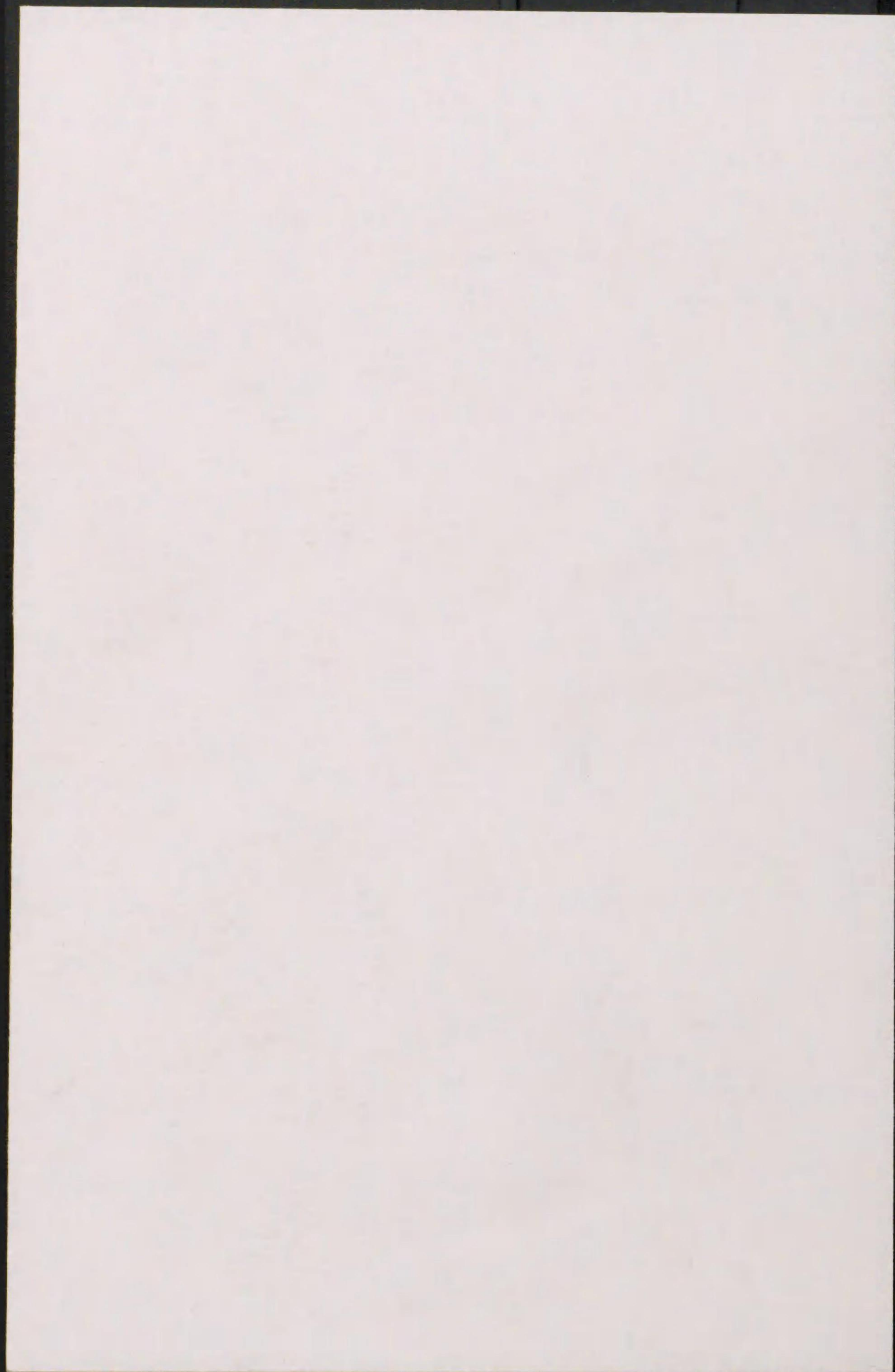
一切の筆を絶つて一年有餘、靜かに想を練つた他見男氏の得意の作である。その昔ハイデルベルヒの皇子が母校を戀して「青春よ……さらば」と愛惜した姿にも似た美しくも氣高い戀の文字より成つて居る。

卷頭、一女性より愛人に送れる手紙數十通、悲しき戀を展開せしめて若人の袖を搾らす事であらう。其の他の數篇他見男氏一流の輕妙な筆は奔馬の如く縦横に走つて無限の感銘を與へずに置かない。速かに披き給へ。

568

240

568
246

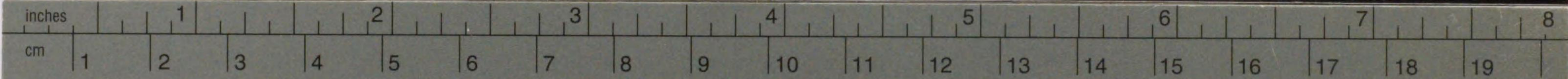
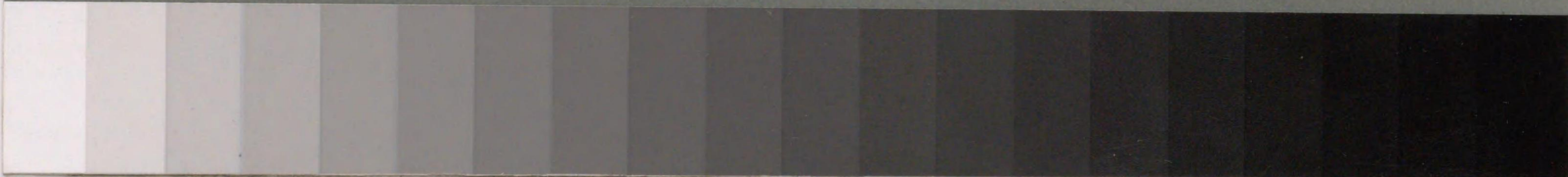


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

